

実行委員として今回の研修に参加して

信州大学人文学部4年 実行委員
青山恭子（日本語教育学専攻）

「私は実行委員ですが、研修期間中は自分自身も一参加者として、韓国カトリック大の皆さんとも日本語教育学の皆さんとも他学部・他専攻の皆さんとも交流を深めていきたいと思っています。」これが私の研修初日に行った自己紹介での挨拶だった。研修が始まるまで、この研修の実行委員として日程の組み立てなどをしてきたが、いまひとつ研修の実感というものが沸かないままだった。正直な所、とにかく日程の調整などの目先の仕事で頭がいっぱいだったので、研修本番でも実行委員という、研修を支える裏方での参加という気持ちでいた。しかし、研修初日にカトリック大生の皆さんを乗せたバスが教育学部の宿舎に到着し、遙々韓国から来た友人たちを見つけると、久々の再会に涙が出るほど嬉しくなった。ついに研修が始まるのだという緊張感と友人と再会できた嬉しさで、実行委員ではあるが、一参加者としてこの研修を楽しみたいと思い、自己紹介の挨拶をこれに決めた。

今回の研修は全員が寝食を共にすることができたので、私が思っていたよりもカトリック大の皆さんと交流する時間を持つことが出来た。就寝までの時間に、前回の研修で友達になり一年ぶりに再会した友人や、今年の春までチューターをしていた友達が私たちのいる部屋まで遊びに来てくれた。実行委員の私たちはパートナーを作らなかったのだが、とても楽しい時間を過ごすことができた。そのとき部屋まで来てくれた友達が「恭子たちが実行委員で嬉しいよ。自慢できるよ。」と言ってくれたのがとても嬉しくて、私が実行委員としてできることを精一杯やって、この研修に参加してよかったと思ってもらえるようにしようと思った。

この研修中で一番やりがいを感じられたのは、カトリック大生の皆さんと日本語教育学の皆さんがとても楽しそうにしている顔を見たときだ。この春から約4ヶ月間、日程作りに追われているときも、自分たちが研修を組み立てているという思いからやりがいを感じてはいたが、実際に自分たちの計画した研修で参加者の皆さんが楽しんでくれているのを見ると、実行委員としてのやりがいを感じられた。中でも忘れられないのが、カトリック大の皆さんとパートナーが穂高町の地域のご家庭でのホームステイから帰ってきたときである。帰ってきた皆さんの表情から、充実したホームステイをさせていただいたことが伝わってきて、とても嬉しかった。これも一重にホストファミリーを務めてくださった穂高町の皆様

と穂高町役場の皆様のお陰なのであるが、ホームステイを計画して本当によかったという思いでいっぱいになった。ホームステイは、集団での研修ではなかなか体験できない生の日本の家庭を体験するとてもいい機会だったと思う。できあがった写真を見せてもらおうと、ホストファミリーのご家族と楽しそうに笑っているカトリック大の皆さんとパートナーが写っていて、私自身はホームステイに行っていないが、自分もホームステイに行ってきたかのように満足した。

日本語教育という視点からは、カトリック大の皆さんよりも、むしろ私の方が勉強させてもらったという気持ちである。カトリック大生が研修中に日本について様々な質問するたびに答えていたので、わかりやすい日本語で相手に説明する力がついたと思う。この「わかりやすい日本語」というのが意外に難しく、自分たちが普段使っている日本語を簡単な日本語に変えようとするとなかなか単語が出てこない。わからせてあげたいという気持ちで一息懸命に説明をした。

また、日本の文化であっても、日本人の私が知らないことが多くあり、勉強不足だと痛感した。現在の日常生活ではあまり重要視されなくなってしまったマナーや挨拶であっても、日本の文化として知っておくのが日本人としての礼儀であり、今回のような国際交流の場で発揮されるのだと感じた。国際交流の場では日本人だから日本の文化を知っているとみなされることは当然のことだろうし、私も私の生まれ育った日本の文化についてもっと伝えたいと思った。日本語教育という立場から見ても、日本語学習者は日本語のバックグラウンドとして日本の文化・風習に触れておくと、日本語の挨拶や敬語の理解がより一層深まるのではないのかと思う。また、外国語を学ぶ際には誰もがその国に興味を抱くことから始まる。日本の持つ文化・風習を知ってもっと日本について知りたいとか、日本をもっと好きになってもらったら、勉強への意欲も沸くのではないかとも思う。

私は「日本語の挨拶をする」と、「日本語で挨拶をする」ことは違うことだと思っている。韓国語を話せない私でも韓国語の挨拶を片言ですることはできる。それは私は「韓国語の挨拶をする」ということだと思っている。でも今回カトリック大から来られた皆さんは日本人の私以上にとても丁寧に「日本語で挨拶」をしていた。それは日本に対する理解の深さから来るのだと思う。今回の研修がカトリック大の皆さんの更なる日本理解に少しでもお役に立てていたらたいへん嬉しいし、日本語教育学の学生が日本語教育について改めて考える機会になったなら、実行委員として今回の研修に参加した私にとって、研修が成功したと言えると思う。

「組織」のなかで

信州大学人文学部4年 実行委員
荒井典子（日本語教育学専攻）

2005年8月5日から8月11日の一週間。この一週間は私は忘れることはできないだろう。

この一週間は「日韓言語文化研修プログラム2005」と命名された。私たちは今回の研修にこのような名前がつく前の段階、この企画が一枚の紙の上のものでしかなかったときから携わらせていただくことができた。

昨年末、初めてこのお話をいただいたときはすべてが「案」の状態、いづこで何をどのようにするのか、まったく決まっていなかった。私たちはコーディネーターとして、日程の調整、松本市や穂高町の方・韓国の学生との連絡、宿舎・食事・施設の手配、予算についてなど、さまざまなことを少しずつではあるが決めていった。ひとつのこの決定により他のこともすんなり決まっていけばよいのだが、そのように思い通りにいくはずはなく、その度に問題点に当たり、もう一度考えを練り直すという一進一退の連続であった。しかし同時に、今まで形としてまったく存在しなかったものの骨組みが現れ、実現されていくことに喜びを感じた。自分たちの手で作り上げているという満足感と充実感もあった。

研修を実施する一週間を作り上げるために、多くの人と出会い、話をし、互いに協力をしてきた。このような活動をするまで知ることのなかった市や大学の体制を知り、各方面においてそれぞれの役割を担い、活躍する人々と知り合えた。その中で学んだことがある。それは「組織」というものについてである。

今回の研修は本当に多くの方々の手によって作り上げられたものである。主催となる信州大学人文学部をはじめ人文学部後援会・人文学部同窓会、実習寮をお借りした信州大学教育学部、松本ぼんぼんへの参加や松本城視察でお世話になった松本市役所広報国際課・松本留学生応援ファミリーの会、穂高町での大部分をお世話になった穂高町役場、ホームステイを引き受けてくださった多くの穂高町民の方々。挙げていけばきりが無いが、本研修はどの方々を欠いても実現は不可能だったといえよう。これらの組織や団体は今回の研修のために編成されたわけではなく、日頃から各組織としての役割を担っているものである。特に私は松本市関係の責任者であったが、そのなかで広報国際課や応援ファミリーの方々から教えていただいたいちいちの事は、たいへんに大きいものであった。私たちのように今年初めて韓国の学生を迎える新参者は、迎え入れにあたっての心構えや態度をそこで学ばせていただいたといえる。

「世界各国からここ信州に学びに来る留学生に、ファミリーとのふれあいを通

して、学ぶと同時に信州での楽しい思い出も作ってってもらいたい。」このような理念に基づき、物質的・精神的の両面で支えている松本留学生応援ファミリーの会は、松本市内にいる留学生にとっては、馴染み深い、まさにファミリーのような存在であったろうが、私たち日本人学生にとっては初めて関わる組織であった。研修では松本ぼんぼんに参加する際の浴衣の着付けなどで大変お世話になった団体である。今回は、例年一般の留学生を対象に行われている「松本ぼんぼんに参加しよう」の企画に他の正規留学生と同様の待遇で参加させていただいた。浴衣の手配から着付け、髪の設定にいたるまですべての面倒を見ていただき、日本人学生にまでも目をかけてくださった。そのおかげで多くの学生がちゃんと浴衣を着こなし、素敵な髪飾りをつけて参加することができた。

私たちが参加することで例年の倍程度にまで増えてしまったことに多大なご苦労があったろうと思われるが、代表の方はこうおっしゃった。「正規の留学生かどうかではなく、今回日本に来た学生にも、様々な地域から信州大学に来ている日本人学生にも同じように接し、ここ、松本での思い出を楽しいものにしてもらいたいんだよ。」今回飛び入りの参加であった私たちであったが、楽しんでもらいたい、交流を少しでも深めたいというこの一心でセッティングしてくださる地域の方々があり、その方々のおかげで多くの人が豊かな気持ちで、ここ松本で暮らしているということを実感した。

また、実習寮をお借りする際にしても、私たち人文学部という組織と所有者である教育学部という組織、また、実際に管理をしている教育学部附属中学校、信州大学生の活動を支えている学生支援課・学生生協など、さまざまな組織が関係し入り組みあっていたが、相互に協力関係を結びあっていることで私たちの学生生活は保障され、何事もなく大学生活を過ごしていただけるのだということを感じた。

普段生活しているだけではなかなか気づけない大学の内側の部分や組織自体を知ること、その場その場で支えてくださっている方の存在を知り、「何事もなく生活」している現在を、そして「何事もなく生活」させていただいてきた4年間のありがたさを感じた。

4年生という最後の年に遅ればせながらこのようなことに気づけたこと、4年生という最後の年に日本で第一回目の日韓言語文化研修プログラムが開かれたこと。このことは私にとって気づきの大きなきっかけであり、大変ではあったがすばらしい経験を与えられることであった。この研修の実行委員を務めたことは、ひとつのことを達成しえた自信にもなり、多くの人たちとの出会いや人の温かさを改めて感じさせていただく経験となった。このような機会を与えられたことに感謝し、この研修に携わったすべての方々に対して御礼を申し上げたいと思う。そしてまた、今後もこのような交流が続けられていくことを願う。

相互交流

信州大学人文学部4年 実行委員

玉井芳恵（日本語教育学専攻）

8月5日から8月11日まで正味1週間、第5回韓国言語文化研修・第1回韓国カトリック大学日本語文化研修が行われた。本年度の研修が、カトリック大学を日本に、そして信州大学に招いて行う最初の研修となった。

本年度の研修について振り返る前に1年前の日韓言語文化研修を振り返る。昨年、第4回韓国言語文化研修に参加し、カトリック大学生と話す機会が多くあった中で、是非日本に行ってみたいという声が多く聞かれた。実際に私達がカトリック大学校でお世話になったことがきっかけだろうか。カトリック大学生にとっては他言語他文化を持つ外国人である私達信州大学生に接したことで、私達の母国である日本に興味を抱いてくれたのだろう。しかしいざ日本に、信州大学に行きたいとカトリック大学生が思ってくれても、短期間で、しかもある程度学問的な事柄も取り入れてその期間を過ごすことのできるシステムが昨年度まではなかった。今回の研修を終えた今、思い出すことがある。昨年度の研修の最終日、研修参加者で車座になり別れの朝ご飯を食べた後の沖先生のお話である。言葉は違っているが、このようなことをおっしゃった。「是非来年か再来年は信州大学で研修が行えたら。」私は交流というものは人と人との交流でしかないと勘違いしていたが、そうではない。今回実感したのは、交流とは人と人の五感が感じる全てのものを言うのではないか、ということである。例えば日本語の実際使用の場面で考えてみると、話している相手だけではなく、周囲の関係のない人が話す、私達にとっては日常の雑音のような日本語。このような音も日本語として耳に入ってくるならば、カトリック大学生にとっては日本語の聞き取りという実際の体験になる。そういえば私も昨年韓国に研修に行った際には、五感全てから“韓国という外国”を感じた。異文化に直接触れると言えればいいだろうか。自分にとって、その場所にいるというだけのことが貴重な異文化体験となる。昨年度、先生が上記のように話されたのは、信州大学生だけがこのような五感で感じるができる異文化体験を経験するのではなく、カトリック大学生も体験する。そうしてこそ、外国であるお互いの国を実際に理解することが出来ると考えていらっしやっただからではないだろうか。研修から1年経ち、カトリック大学生を迎えた今年度の研修を終えた今、思う。

研修中には盛りだくさんの行事が詰まっていた。歓迎会、日本のお祭り体験として松本ぼんぼんへの参加、日本語教育実習、ホームステイ、送迎会。多くの行事を参加者全員で成功に導き、楽しみ、そして一緒に勉強することが出来たと思

う。それらの行事での思い出は胸にしまい、今回の研修では“相互交流”について自分なりに考えたことがもう1つある。上述したお互いの国を実際に感じ取り、興味を示し、理解しようとする、これも1つの相互交流である。これに加え、昨年度、今年度と参加するというその全体の交流の中での個人的なつながりが大変貴重なものであるのだ、ということを感じて実感できた。

研修前準備を進めるために連絡をとっていた学生、昨年度お世話になったホームステイペアの学生、フリートークで仲良くなり連絡をとっていた学生、多くの学生と繋がりを持つことが出来た。そして実際研修が始まりカトリック大学生を信州大学に迎え、3・4年生の中には昨年仲良くなったカトリック大学生と2度目の再会を喜んでいる姿もあった。私も1年ぶりに再会する学生が何人もいた。1週間過ごすたくさん話して多くのことを共に経験して別れ難くなる。結局のところ、これが“相互交流”なのだと思う。出会って、お互いのことを理解しようとし、期間が終われば分かれるがそれでも次の機会があるから、と思う。もちろん1回でも貴重な交流の場である。経験したことは相互理解に繋がるだろう。しかし相互交流は次に繋がるのが大切であると感じた。経験を共にした他文化他言語圏の友人と繋がりを持ち続ける。次回があればこそ関係を続けたいと思えるだろうし、より理解しようと努める。よりよい関係を築くことが出来るのではないだろうか。今回出会えた多くの方はカトリック大学生だけではない。研修という行事は本当に驚くほど多くの人々の支えがあって成り立ったものだった。この繋がりも一過性のものではあって欲しくはない。例えばホームステイ先のファミリーやそれぞれに関係のあった方々。繋がりを絶つことなく次回に再会できる時まで良い関係を続けていくことができれば、本当に実りのある相互交流が出来たといえるのではないかな。

一週間という研修期間中、学ばせていただいたこと、体験させていただいたことは言い表せないくらい多い。本当に多くのことを感じた中でやはり一番これからの交流に期待することは“交流を繋げていって欲しい”ということである。私も本年度の研修で親しくなった友人やお世話になった方々との繋がりを大切にしていきたいと思う。

本研修に携わり、協力して下さった皆様に感謝したい。そしてこれからも参加・協力して下さる全ての人への感謝の気持ちを忘れずに研修が続いていくことを願う。

貴重な経験

信州大学人文学部4年 実行委員

深澤史愛（日本語教育学専攻）

8月5日から11日までの7日間、第1回韓国カトリック大学日本語文化研修が行われた。今回の研修は、第5回を数える韓国言語文化研修で初めてカトリック大学校より李先生と16人の学生を日本に迎えての研修となった。私は、他の日本語教育実習の実習生3人と実行委員になり、沖教官と共に本研修の企画を行った。まず、日程を松本部分と穂高町部分に2分し、それぞれ松本部分と穂高町部分に実習生二人ずつが責任者となって、企画を担当することになった。私は穂高町部分の担当に決まったが、初めて研修を日本で行うため、何もかもが初めてのことで、企画の段階から手探りの状態で、せっかく見学場所をどこにするか、いつ行くか、など計画を立てても、見学場所の都合や時間の問題で、計画を変更せざるをえない状況になるなど、様々な問題が発生した。しかしその都度、穂高町役場の方々の多くの助言と協力のおかげで、だんだんと研修の全貌が目に見える形で作り上げられていくのを見て、とても嬉しく思ったのを覚えている。

最終的に決まった行程では、松本部分では教育学部の実習寮をお借りし、そこに滞在しながら、学長表敬訪問や大学案内、日本語教育実習などの他に、笹本先生に松本城を案内していただき歴史に触れ合ってもらう時間や、韓国にはないお祭りを味わってもらおうと松本ぼんぼんへの参加が組み込まれていた。穂高町では、穂高町よりお借りした鐘の鳴る丘集会所を拠点に、高橋節郎美術館や穂高神社、御船会館の見学や、体験学習として温泉体験やそば打ち体験、ホームステイなどが予定されていた。松本部分、穂高町部分どちらを取ってもカトリック大生だけではなく、留学生や県外出身者の多い日本語教育学専攻の学生や、外部参加者として参加した信大生にとっても非常に多くのことを経験することができ、本研修が国際交流という観点だけでなく、長野県の地域文化と触れ合うことも出来る内容となっていることが分かる。

実際に研修が始まってみると1週間という日程はあっという間に終わってしまった。私は去年の秋に行われた第4回韓国言語文化研修に参加していないので、カトリック大生と会うのは初めてだった。そのため、カトリック大生とどう接して良いか分からず、中部国際空港からのバスが実習寮に到着した時は、とても緊張した。しかし、信大生とカトリック大生が去年の研修で友達になった人同士で再会を喜び合っているのを見て、また、プレハブで行った歓迎会の時のみんなの楽しそうな顔を見て、緊張はなくなった。むしろ、久しぶりに再会した信大生とカトリック大生から1年間の空白を感じさせない、ずっと一緒にいたかのような

一体感を感じて驚き、また、去年の交流の成功を感じ、感慨深いものがあった。研修に盛り込まれた行事はどれも興味深いものであったが、その内のいくつかは特に印象に残った。まず、松本ぼんぼんについてだが、私にとって松本ぼんぼんへの参加は、地元出身でありながら初めての参加となったのでとても楽しかった。残念ながら小一時間程踊ったところで雷雨のため中止となってしまったのだが、初めて浴衣を着て、びしょびしょに濡れながらもぼんぼんを踊れたことはとても面白かった。印象に残っている行事のもう一つはホームステイである。私は実行委員であったため鐘の鳴る丘集会所に待機していてホームステイには行けなかった。しかし、ホームステイに出かける前は緊張のため体を硬くして、迎えに来てくれたホストファミリーの方と出かけて行ったのだが、次の日には多くの学生が、「とても楽しかった」と笑いながらホストファミリーの方と一緒に帰ってきたことは、とても印象に残った。何人かの学生に聞くと、浴衣を着せてもらった、抹茶をごちそうになった、人形を作った、美術館などに連れて行ってもらったなど、たいへん貴重な体験をして来たことが分かった。ホストファミリーの方々には、カトリック大生と信大生のペアでのホームステイを受け入れていただいた上に、本当に貴重な経験をさせて下さり、心から感謝の念を覚えている。

今年の研修はたいへん心に残る楽しいものであったが、唯一心残りなのは、実行委員であったためにカトリック大生とペアを組めなかったため、極少ない人数の学生としか言葉を交わすことが出来なかった事である。しかし、中部国際空港でカトリック大生と別れる時に、何人もの学生から「来年も会えるでしょ?」「来年も会おうね!」と何度も言われた。来年はもう卒業だからと、言う残念そうに「バイバイ」と言って握手をしてくれた。直接話をしなくても一緒に1週間という期間を過ごすだけで、友達になれるのだなと思った。実行委員として4月から本格的に準備に入ったが、準備期間中は様々な事があった。しかし、カトリック大生と信大生の空港での表情を見ると、今までやってきた事が実を結んだような感じがした。

今回の日本語文化研修は、多くの方に支えられながら行われた。松本市役所の広報国際課の皆様、穂高町役場の財政企画課、生涯学習課の皆様、澤木国際交流委員長、市川副学部長はじめ総務係、学務係の皆様には準備の段階から研修が終了するまでの長い間本当にお世話になりました。最後に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。そして李先生はじめカトリック大生の皆様、初めて日本で行う研修ということで至らない点が多々あったと思いますが、ご協力本当にありがとうございました。また、本研修は「学生主体で」ということで、各機関へのあいさつ回りの段階から企画・運営まで実習生に任せてくださり、至らない点ばかりの私たちをサポートして下さった沖先生に心から感謝申し上げます。

交流の香り

信州大学人文学部4年
臼井啓祐（日本語教育学専攻）

真新しい中部国際空港に着き、バスを降りた。その瞬間、倒れるような蒸し暑さに驚いた。思えば八月なのだから当然ではあるのだが、あの日は特に暑かったと思う。空港内は採光を意識し、開放的で清潔な印象だった。私たちは空港の入国口の前で大きな垂れ幕を持って待つことにした。通りがかる一般の人が気にしてちらりと目をかける姿が結構あった。私はその度になぜか恥ずかしいというよりは嬉しい気持ちになった。待っている信大の学生の緊張が最高点に達した頃、李先生を始めとしカトリック大の学生が次々と現れた。懐かしい顔を見る度に「ああ始まるんだ」、そう感じた。

昨年までの交流は、日本人学生が韓国に行くという一方通行のものであり、お互いの関係は深まっていったとはいえ、一方で「相互」という面ではまだ未完成的なものだったと思う。開催できない理由としては施設や日程など様々なものがきつく絡み合っていたことが挙げられる。しかし年々少しずつそれらをクリアしていき、ついに今年は開催に漕ぎ着けたのである。もちろんその陰には様々な方面の方からのご支援があったものであり、そうした援助をしてくださった方のためにも必ず成功させなければと感じていた。

今回の研修は今まで開催できなかった分を挽回するかのよう、1週間という短い期間に様々なものを取り込んだ本当に充実したものであった。それはまるでバイキングの皿のように、あれもこれもと魅力的なイベントが企画されており、かなりのハードスケジュールでもあった。前半の松本でのメインイベントは、やはり「松本ぼんぼん」だろう。カトリック大の学生は皆、踊りの飲み込みが早く、数回の練習の後には完全に覚えていた。男子学生は法被、女子学生は浴衣を着たのだが、その艶やかさは目を見張るものだった。祭りは大雨に降られてしまい、あっけなく終わってしまったのは残念だったが、わずかな時間ではあったものの、皆笑顔で踊っており、その楽しそうな顔を見ると準備の疲れなどどこかに吹き飛んでしまった。信大の学生でも踊りに参加することなく卒業する人が多い中で、このように参加型の活動が成功に終わったことが何よりよかった。その他にも松本城の見学など、古都松本の魅力を十二分に味わってもらえたと感じている。後半は舞台を穂高に移して行なわれた。韓国料理会や蕎麦打ち体験、美術館巡り、ホームステイなど実に多種多様だったが、どれも大成功だっただろう。鐘の鳴る丘を中心に、四方を雄大な大自然に囲まれた中で心身ともに落ち着きながらも、

非常に活発な交流が行なわれた。どの活動でも穂高の方の温かさを申し訳ないくらい感じた。それでも正直なところ、ホームステイについてはきちんと行なわれるか心配していた。しかし翌日皆の話を聞くと余計な心配だったとすぐにわかった。気がつく日韓の学生が一様に、自分たちのホストファミリーの自慢を始めていたのである。私たちのホストファミリーの方も非常に素晴らしい方だった。御夫妻は、私たちに息子のように接して下さり、まるでずっと昔から知っていたかのような親近感を感じた。お食事も穂高で取れた地場野菜をふんだんに使った豪華なものだった。翌日は白馬のジャンプ台に連れていってもらったりと、本当に感謝してもしきれない。

その後穂高町は合併して安曇野市と名を変えた。穂高町で行なわれた研修はこれが最初で最後となった。それはまたそれで忘れられないものになっただろう。思えば市町村合併をして競争力を高めることは、信州大学とカトリック大学校の交流でも同じだと言えるのではないか。迫り来る大学改革の波の中で、信州大学も今年法人化し国立大学法人として新たなスタートを切った。これからは今まで以上の競争が予想され、より一層の努力が必要な一方で、十分飛躍の可能性があると思う。今回のように国際的な交流を活発にすることで、国際的にも競争力をもった大学に躍進してほしい。

さて、来年はおそらく信大の学生が韓国に渡り交流をするだろう。今年は迎える側として、様々なことを学んだ。おそらく来年はまた、交流に臨む意識が変わりより充実したものになるだろう。ただ一つ気掛かりなのは、来年は男子学生が居なくなる可能性があるということだ。カトリック大学校では多くの男子学生が日本語を学んでいる。それに対してこちらがゼロというのは恰好がつかない。その時は今回のように他学部の生徒も参加できるようにして、学部間から大学間の交流に発展して欲しい。

今回の交流で様々な香りを感じた。バスから降りて感じた夏の香り、松本で感じた伝統的な香り、穂高町の蕎麦打ちで感じた瑞々しい蕎麦の香り、美術館で感じた優雅な香り、料理会やホームステイで感じた懐かしい香り、バーベキューで感じた焼肉の香り、そして今回の研修で感じた国際交流の新鮮な香り。きっといつまでも私の頭の中に残っているだろう。

笑顔の見える交流

信州大学人文学部4年

奥田江美子（日本語教育学専攻）

今回の第一回韓国カトリック大学日本語文化研修を通して、私はある3通の手紙を受け取った。それぞれ差出人の違うその手紙を読み返すと、自らが今回の研修で目指した「笑顔の見える交流」に対する達成感を感じる。昨年の第四回韓国言語文化研修の際、カトリック大学の学生や先生方をはじめ、ホストファミリーのみなさんが私達を温かい笑顔で迎えてくださったことが、私を今回の研修に主体的に参加させる原動力になっていた。日本に来てくれる際には、同じように笑顔でのおもてなしと交流をしようと心に誓ったのだ。

研修の1週間はあっという間に過ぎていった。お祭りに温泉、おそばにわさび。触れてほしい、実感してほしい日本の文化がたくさんある。しかしそのことに気をとられすぎて、私は「笑顔」を忘れたときが多々あったのではないかな。例えば温泉体験でのこと。そのときは入浴時間があまりなく、とにかく全員が無事に入浴を終えて宿泊所に帰ることばかりを考えていた為、カトリック大学生が困惑した様子でいることに気づくのに時間はかかった。韓国には共同で入浴する習慣があまりないということは、知識として知っていたはずであった。しかもそれを短時間のうちに済ませることに戸惑う気持ちを十分に察することもできたはずであった。私が「ごめんね」と言うと、カトリック大の学生達は、「大丈夫」と笑顔を向けてくれた。笑顔でおもてなしをするつもりが、逆に笑顔で気を遣わせてしまった。日本での1週間は楽しんでもらえただろうか。だいぶ疲れていたのではないだろうか。研修後、そんな心配をする私の元に、カトリック大学生の一人から手紙が届いた。その手紙にはこう記されていた。

「信州大学の学生のみんなが暑さをもものともせずいろいろな親切にしてください、本当に心から感謝しております。みんなが優しく、いつもにこにこしている姿に感動しました。」

よかった。みんなの笑顔が届いていたと安心した。そういえば、と彼女達と共に日本のスーパー見学に行ったときのことを思い出す。彼女だけでなく、カトリック大の学生達は皆、とても生き生きとした表情で買い物を楽しんでいた。それを見ていた李範錫先生に、どうしてスーパーに連れてきてくれたのかと尋ねられ、私は昨年のお話をした。昨年度の研修で、私を含め多くの信大の学生がホストファミリーなどに韓国のスーパーに連れて行ってもらった。それがたいへんよい経験になったので、逆に日本のスーパーにも連れて行ってあげたいと考えたのだ。このプログラムは実行委員の企画であって、私が考えたものではないのだが、

私はつい誇らしげに先生にお話してしまった。そして同時に、昨年度の研修がきちんと活かされていることを実感していた。

今回の研修ではまた、新しい交流をすることができた。ホームステイ先のお宅で、小学生と中学生のお嬢さんたちに会うことができた。兄弟がいない私にかわいい妹ができたようで嬉しかった。その夜は、彼女達もお手伝いをしてくれたというおいしい手料理までいただいてしまった。そして翌日、小学6年生のかわいい妹から、素敵なお手紙もらった。

「よその人がとまりに来るのは初めてで、とってもドキドキしていたけど、だんだん慣れてきて、いっぱいしゃべることが出来てうれしかったです。」

何度かホームステイ経験のある私でさえ緊張していたのだ。初めて自分の家に家族以外の人泊まりに来ることになったら、ドキドキして当然だ。それでも彼女たちをはじめ、おばあちゃん、お父さん、お母さん、お母さんのお姉さんのご家族は私たちをあたたかく迎えてくださった。

ホームステイで素敵なおご家族にお会いして、私も自分の家族に会いたくなり、研修後は祖母の家に遊びに行った。そして祖母にあるお願いをした。それは、ホストファミリーから頂いた反物で、私に浴衣を縫ってほしいということ。快く引き受けてくれた祖母からは、数日で浴衣が届いた。私は祖母にお礼の手紙を書き、今回の研修で得たこと、穂高町でのホームステイの思い出などを綴ったが、その返事には、研修を振り返るだけでなく、その先のことを考えさせられる言葉が記されていた。

「昔の勉強をしたあたしには今の世界がわかりにくい此の頃です。江美子はしっかりと目標を見つめて進んでください。」

私達は今まさに、国際的な交流が盛んに行われるようになった現代を反映する環境で学んでいるのだ、ということを実感した。祖母の時代、日本の大学生と韓国の大学生が交流するということが考えられただろうか。おそらくこの先、例えば私のかわいい妹たちが大人になる頃には、外国人が自宅へ遊びに来ることは、より自然なことになっているだろう。

今回の研修を振り返ると、信州・カトリックの両大学生の笑顔はもちろん、先生方、穂高町の方々、ご協力いただいた全ての方々の笑顔が浮かんでくる。あの笑顔をそのままに、今後は「笑顔の先」にある、より深い交流を目指して進んでいきたい。

ホームステイを経験して

信州大学人文学部4年
高田千穂（日本語教育学専攻）

今回の研修は、韓国のカトリック大学生と先生を日本の信州大学に招くという初めての試みであった。初めての企画ということで、宿泊施設や食事に始まり、プログラムの組み立てなどすべてゼロから考えていった。実行委員の補佐的な立場として松本市や穂高町の方々、信州大学の方々との幾度にもわたる打ち合わせなどにも参加することもあった。昨年の韓国言語文化研修では、カトリック大学のみなさんに手厚く歓迎していただき、とても親切に接していただいた。カトリック大学の学生の皆さんは、毎年このように大変な思いをして私たち信州大学の学生を迎えてくださっていたのだということを実感できた。今回の研修では、昨年の恩返しができるように、そして、充実した研修生活を送っていただけるようにという気持ちで臨んだ。

今回の研修ではさまざまな行事を体験したが、私にとって最も印象深かったものは、穂高町で行ったホームステイである。これは、穂高町の役場の方々と町民の方々のご協力のもとで行われたもので、韓国人学生と日本人学生がペアとなって、穂高町の町民のお宅へ一泊二日のホームステイをさせていただくというものであった。昨年の研修でホームステイは一度経験していたものの、見ず知らずの日本人の方のお宅に一泊するという経験は今まで一度もなかったため、この行事は韓国人学生はもちろん、日本人学生にとっても緊張するものであった。

ホームステイの前日にはお世話になるホストファミリーの方々との顔合わせを兼ねた交流会を行った。私たちを受け入れてくださるホストファミリーの方は、ご年輩のご夫婦だった。挨拶をかわし、明日の予定や食事についてなど、気さくにお話してくださり、ホームステイがとても楽しみに感じられた一方で、ご年輩の方のお宅に上がるということで、粗相があったらどうしようと、自分の礼儀作法に不安を覚えた。今回の研修が始まる前に、日本語教育実習生が授業準備をしている様子を見る機会があった。実習生が日本のいろいろな礼儀作法について調べているときに、ちょうど居合わせたのだが、今まで知らなかった礼儀作法が幾つかあった。私は小学生の頃から祖父母とも一緒に暮らしており、どちらかという礼儀作法は身につけている方だと思っていたので驚いたのだが、礼儀作法について事前に勉強しておくべきだったと後悔し、日本語教育学を専攻している学生であるのに日本文化における知識がまだまだ足りていないことを情けなく思った。

そして当日、お父さんが迎えに来てくださり、いよいよホームステイが始まっ

た。まずはお父さんとお母さんとパートナーと私の4人で、今日・明日をどのように過ごすかということについて相談した。お父さんもお母さんも私たちの意見をいろいろと聞きだし、私たちが話しやすいようにしてくださり、少しずつ緊張が和らいでいった。温泉に入れていただき、浴衣を着せてくださり、私もパートナーもとても喜んだ。夜はご馳走をいただき、そのときにいろいろな話をした。家族の話や、今後の進路について、あるいは韓国料理の話など、会話は尽きることがなかった。食事を終え、寝室に入ってから、パートナーと二人でいろいろなおしゃべりをした。今まで、交換留学生と話す機会は多くあったが、二人きりで話す機会は初めてであった。食事の際の会話について話をしたとき、年配の方と日本人学生とでは話すペースや内容などが違い、会話が少し難しかったようだ。そして、会話に失礼がなかったか、ということも、とても気にしているようだった。昨年の研修と今年の研修を通して感じたことなのだが、韓国人学生は敬語をたいへんしっかりと使って話している。日本人学生は、カトリック大学の学生に対して敬語を使って話すことはたいへん少なかったように思うのだが、カトリック大学の学生は、日本人学生に対して、敬語を使って話していることが多かったように思う。また、韓国人学生と日本人学生が何人か集まっておしゃべりをしていたのだが、後から、「年上だということを知らず、敬語を使わなくてすみませんでした」と、とても申し訳なさそうに謝られたことがあった。私たち日本人学生は、一つくらい年の差であれば、構わずに敬語を使わないことも多くある。目上の人を尊重する意識が、日本人よりも韓国人の方が強いように感じ、これが文化の違いなのかと感じた。或いは、日本人も目上の人を尊重する文化はあるはずだが、若い年代になるにつれてその意識が薄れつつあって、実は私たち自身、日本人の文化や意識が薄れつつある年代といえるのかもしれないと感じた。韓国では保たれ続けている自国の精神や文化が、なぜ、日本では失われつつあるのか。このことに、興味を持ち、一方で文化を維持することとはどういうことかを考えさせられる経験となった。

今回の研修を通して、たくさんのことを学び、反省する機会も多く、たいへん貴重な経験となった。今回の研修で知り合ったカトリック大学の学生とはこれからも交流を続けていき、今後もいろいろなことを学んでいきたいと思う。また、カトリック大学や信州大学、松本市、穂高町のたくさんの方々のご協力、ご尽力なくしてはこのような企画は成り立たなかったことを実感し、ご協力くださったみなさまに厚くお礼を申し上げたい。

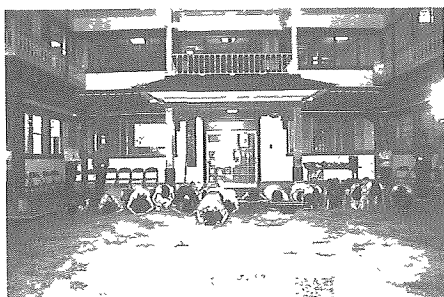
日韓言語文化研修プログラム2005 終わりの言葉¹

高田千穂

一週間の本研修も、とうとう最終日となりました。今回の研修は、カトリック大学の皆さんを信州大学にお招きするという初の試みとなりましたが、カトリック大学の皆さんには充実した1週間を過ごしていただきましたでしょうか。もし、充実したときを過ごしていただけたのなら、とても嬉しいです。

今回の研修では、前半は松本市で行いました。学生たちがみな浴衣を着て、松本ぼんぼんという韓国にはない形のお祭りに参加していただいたり、松本城見学なども行いました。後半は穂高町に場所を移し、韓国にはない温泉体験をしたり、穂高町のみなさんのご協力の下ホームステイも体験させていただきました。特に、ホームステイでは、学生がみなとても楽しい時を過ごさせていただきました。私がお世話になったお宅では、温泉のお風呂に入れていただいたり、夜はごちそうをいただいとお父さんお母さんとおしゃべりをしました。また、今日はお母さんに小さなお人形作りも教えていただきました。いろいろなお世話をしてくださった穂高町のみなさん、私たちを受け入れてくださったみなさん、本当にありがとうございました。

それではみなさん、今日は最後の夜ですので思う存分名残を惜しんでいただきたいと思います。



(韓国での最高の礼法のご挨拶をいただいた)

¹ 本記録は、8月10日の送迎会にて、日本人学生の代表として挨拶をした時のスピーチ原稿である。

顔の見える交流から学ぶこと

信州大学人文学部 4年
古田知子 (日本語教育学専攻)

「日韓言語文化研修プログラム2005」は、東アジアの国家関係が緊張を高めつつある中で実施された。アジアへの侵略戦争の歴史を正当化していると批判の出た歴史教科書が教科書検定を通る。A級戦犯を祀った靖国神社へ総理大臣が参拝する。中国や韓国をはじめアジアでは、そうした日本への非難が少なからず出ていた。こうした時だからこそ、日中韓の学生が膝をつき合わせて日本の言語文化を学び、一週間ともに過ごすということの意味は大きい。そう考えて、私はこの「韓国言語文化研修」の個人目標を“等身大の自分で接し、顔の見える交流を通して等身大の日本を知ってもらおう”と決めた。

カトリック大学校の学生たちが長旅を終えてバスから降りた時、一瞬で広がった再会を喜び合うみんなの雰囲気は正直戸惑ってしまった。残念ながら、今年の「韓国言語文化研修」の機会を私は逃していたからだ。今年の「韓国言語文化研修」はそれだけ充実した研修だったのだと実感する一方で、その中に入っていけるだろうか？という不安もあったが、研修が始まるとそれは全くの思い過ごしだったと気付いた。

この研修の中で強く印象に残り、非常に勉強になったことが二つある。一つ目は、三日目の日本語教育実習での討論での経験である。日本語教育実習で私は中級・上級の授業に参加させていただいたのだが、実際の日本語教育の場に臨むのは初めての経験だった。特に心に響いたのは、韓国の学生たちの日本語学習に対する誠実な姿勢だった。「日本における韓流ブームをどう見るか」というテーマで討論を行ったのだが、同じグループの学生から「“日本における”はどういう意味？」とすぐに疑問が出てきた。“日本における”の意味をその韓国人学生が理解できる日本語で伝えることは思っていた以上に難しく、考えあぐねてしまった。

“日本で”と言い換えられることを伝えると何とかわかってもらったが、考える時間を作ってしまったたり、言い換えられても両者の何が違うのかをきちんと説明することができなかった。母語話者が普段気にしない表現について質問をされることは、私にとって貴重な経験となった。母語として日本語を使用することと、それを説明することは全く違うことだと実感を持って学ぶことができたからだ。こうしたやりとりは言葉に関してだけでなく、訪問した先々の場面で“道祖神”や“漆”など日本の文化に関してもたくさん経験することができた。討論のテーマである日本の韓流ブームについて、韓国人学生からは、韓流ブームはドラマや音楽、映画などの文化を通して韓国という国自体への関心を深めることにつなが

るのではないかという発言があった。私もそれはとても大切なことだと思うので、表面的なブームに留まらせない努力をしていきたいと思う。

二つ目は、穂高町鐘の鳴る丘での交流の時に、日韓の結婚観の違いから歴史観まで、率直に聞くことができたことだ。穂高町鐘の鳴る丘では、韓国人学生の準備してくれた韓国のゲームなどがとても楽しく、打ち解けた雰囲気でお話をすることができたのではないと思う。それもあって、じっくりと様々なことを話すことができた。特に私の質問に誠実に答えてくれた朴さんには、心から感謝している。自分の気持ちや考えを正確に伝えるのが難しい母語ではない言葉で話すのだから、なおさらのことである。朴さんが息子さんや娘さんを心配しているというお話は、まるで私の母親が自分のことを話しているのを聞いているようだった。結婚観については、結婚をしたいと思う年齢が日韓で微妙に異なることがわかった。また韓国でも結婚後にも働き続けたいという女性が増えてきているようで、その点では日本と同じ傾向にあるようだ。最後に、今の日本をどう思うか聞いてみた。初めに述べたように、国レベルで見れば必ずしも良いとは言えない関係にあるけれど、普通の国民一人ひとりはどうなことを考えているのかを知る良い機会だと思ったからだ。朴さんは、これまで日本軍の従軍慰安婦になった方のお話を聞いたことがあり、それは本当に聞くに耐えないものだったと話してくれた。同時に、日本も韓国も未来を見ることが大切だとも語ってくれた。とても深い考えを持った人だと感じた。加害の側から、過去のことは水に流して未来を見ようと言うのは、本末転倒である。ただ、現在全ての韓国人や中国人が単純に朴さんのように考えているわけではないと思う。だからこそ、こうした膝をつき合わせての対話を、これからあらゆる場で行っていくことが必要だと、強く感じた。

以上のように、今回の「韓国言語文化研修」は、私にとって国際交流の今日的な重要性を、実感をもって学ぶことができた研修となった。カトリック大学校の学生たちにとっても、収穫のある研修であったことを願っている。国を超えて国際的な交流をするときには、それぞれの国で前提となっていることや常識が違うということを自覚することが必要だと思う。“違い”を踏まえた上で、お互いを理解するために努力をすることが大切である。韓国は生活習慣など日本と共通点が多い国だと思うけれど、以前訪れたベトナムやカンボジアは、宗教、国の制度や経済の発展段階、生活習慣などが日本とは大きく異なっていた。それが交流の障害となってしまいうこともあった。しかし、こうした国際交流は自分たちの文化や言語を相対化して捉える力を養うかけがえのない機会となる。このような点から、今回の研修では多くのことを学ぶことができた。

最後に、カトリック大学校の皆様、快く協力して頂いた松本市・穂高町の皆様、人文学部の諸先生方、人文学部学務の皆様にご心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

交流することの大変さ

信州大学人文学部3年
新井恵美（日本語教育学専攻）

8月4日夏休み最初の日、私たち日本語教育学専攻の学生は大学附属中学校内の一隅にある二階建ての研修寮の前に集まった。次の日から始まる韓国の学生たちとの交流で宿泊施設として使うこの研修寮の掃除をするためである。

去年の秋、韓国カトリック大学で行われた交流に引き続いて、私にとって彼らとの交流はこれが二度目になる。初めての飛行機に、初めて目の前にする外国の街並み、大学キャンパスでの交流の雰囲気、韓国人学生の顔、この間記憶の外に置いてあった思い出が掃除をしながら蘇えてくるのであった。また何よりも強く印象に残っている、慣れない文化に接したときに抱くあの新鮮な驚きと好奇心のせいで、落ち着かないそわそわした感じを思い出した。そして今年はお出迎える側として交流に参加するから、去年とはまた違うものになるだろう、いったいどんな一週間になるのだろうか、とあれこれ思い描いてみたが大変そうだな、と結局は思うのだった。

お出迎える側としての姿勢について考えさせられた出来事が、この前日での掃除で起こった。この研修寮は人が常住していないため、埃もたまってずいぶんと汚れていた。心持つま先立ちになって歩いてしまう。掃除する目的はもちろんこの汚れを取って、気持ちよく寝泊りできる空間にすることであった。私たち学生はグループごとに分担して、文句を口にしながらも黙々と掃除をした。ベッド、床、風呂、トイレなど始めに比べれば随分きれいになった。新しくゴミ袋や石鹸、ティッシュボックスを置いて、冷蔵庫には飲み物を用意し、紙コップも揃えた。しかし窓ガラスが埃で真っ白くなっているのは目に付いたものの、直接その汚れに触れるわけではないから、と放ってしまった。沖先生に指摘されたのはこの点であった。窓の汚れは明らかに目に付き、自分たちが不快な気分になったならば、韓国の学生たちもそう感じるのは当然だろう。そう、迎えてもてなしをする立場にある時に大事なものは気配りなのである。埃が取れた透明な窓からは、校庭の梅の木と遙か前方に連なる北アルプスの峰々が望めるようになり、さわやかな空間を作り上げた。あの掃除する前の始めの状態を知らない彼らが、不快に感じてはいない様子を見て嬉しかった。

さてこのように宿泊施設の整理も含め、お出迎える側の人間にとって大変なところは計画と準備であろう。計画と準備に当たったのは、「日本語教育実習」を受講している4年生を中心にした先輩達であった。しかも今回はこれまでより、この交流に関わる人が増えたことで集団相互間との連絡や調整が大変だったのではな

いかと予想がつく。そのかわり様々なバックアップを頂き、一週間の内容はとても濃いものであった。交流の輪が広がり、関与する人間が増えることでこんなにも中身が変わっていくものなのか、と感心するとともに少し憂鬱な気分になった。というのも、次の交流では、私は4年生となり三度目の参加をすることになる。上級生として準備、計画するに当たり、責任が求められ信頼感を得て失わないようにしなければならないからである。

もう一つ、交流することが大変だな、と感じることがある。それは‘交流すること’自体に向けられて感じる困難さである。信大の学生として、韓国カトリック大学の学生と交流する、というように団体同士の交流の機会は自然に与えられる。けれども実際の交流とは一人と一人の間にあるものではないだろうか。人間同士の交流が現実に行われていなければ、その‘交流’の中身は空っぽで名ばかりなものになってしまうだろう。この人間同士の触れ合いはなかなか難しい。こういう機会でなくても他人と関係を作っていくのは簡単なことではない。特に初めて会った人間といきなりとても近い距離感で関係を築くことは、それなりの積極性と忍耐が必要になってくる。パートナーであった朴さんとの関係は、その期間中なかなか面白いものであったし、またこの関係が密になる時がくることも十分考えられる。朴さんは私の母と同年であり、二人の子供の母で学生である。そのお陰か、心を開いて話をするのが楽だった。それに朴さんに救われ励まされたことが何度もあった。紹介したいのは土砂降りの雨によって途中で中止になってしまった松本ぼんぼんのときのことである。全身びしょびしょになって、ろくに祭りを味わえなかったにも関わらず、朴さんは私に牛筋のビーフシチューをおごってくれて、食べながらこう言った。「楽しかったですよ、祭りの雰囲気にも少しも浸れただけで楽しかった。」そして寮までの帰り道、歩きながらぐったり疲れてしまった私の腕をとりながら、人間の出会いとは「縁」だと語る朴さんの情とたくましさに、私は救われたのであった。

次にこの交流に参加するときは、今回よりずっと人間同士の触れ合いに対して余裕を持って望めそうな予感がするし、上級生としての責任も果たせるだろう。

韓国の親友に向けて

信州大学人文学部3年
粟野 藍（日本語教育学専攻）

試験が終わって、休み暇もなく、日韓言語文化研修が幕を開けた。私は、カトリック大学の皆様を中部国際空港で出迎えるための横断幕を作成するという大任を任されてしまった。月並みではあるが、「ようこそ日本へ!」と拙い筆で書いた。横断幕を広げ、空港の出口で、カトリック大学の方々の到着を待っていると、行き交う人々が、じろじろと横断幕を見ていくので、少し気恥ずかしい。ほどなくして、カトリック大学の方々がぞくぞくと出口から顔を現した。その様子を見て、去年の言語文化研修を思い出し、懐かしさがこみ上げてきた。しかし去年の研修で、パートナーとしてホームステイさせていただいた学生や、特に親しくなった学生の顔は見られなかった。そのせいも、なんと声をかけたら良いかかわからず、躊躇ってしまった。韓国から遥々来ていただいて、感謝と歓迎の意を伝えたいのに、なかなか話しかけられない、もどかしさを感じた。しかし、一週間後にカトリック大学の皆様を見送る際、誰もが心から別れを惜しんでいた。わずかな期間でこれほどまでに互いの距離を縮めることができるとは、全く想像できなかった。

去年、韓国での言語文化研修に参加させていただいたが、日本に帰ってきてから、後悔したことがある。その後悔とは、研修期間中私は、日本と韓国の違いについて、比較することに終始していたということである。カトリック大学の学生との会話の中でも、「韓国人はこういう考え方をするんだ。日本とは違うな。」とか、「日本と韓国ではここが違うな。」と常に考えていた。異文化を直接体験して、日本との違いが目についてしまうのは、自然なことかもしれない。誤解を防ぐためにも、互いの文化の違いを明らかにすることは有意義なことだ。しかし、日本と韓国との相違点を詮索することに、どれほどの価値があったであろうか。相手を理解するということは、互いの文化の相違点を明確にすることではない。もっと心を開いて、相手に接すれば良かったのだと反省した。そこで、去年の研修での後悔と反省を十分に生かし、「心を開いて、相互の理解を深める」ということが、今回の研修での自身の目標となった。

研修が始まると、当初抱いていたもどかしさは、すぐになくなり、打ち解けて話せるようになった。日本人同士では、このようにすぐに打ち解けることはできない。人間同士の距離を瞬く間に縮めてしまう。これは、韓国の学生の大きな魅力の一つであると感じている。今回の研修では、カトリック大学の学生とペアになって行動することが多かった。そのため、パートナーと話す機会が充分にあった。日本の音楽や映画、小泉首相の靖国神社参拝問題などの政治的な話題に至る

まで、様々なことについて語り合った。特に彼女は日本の音楽について、私よりもはるかに精通していて、大変驚かされた。研修の中で、多くの時間をともに過ごすうちに、いつしか彼女は私にとって親友と呼べるほど、大切な存在になっていた。当初の目標通り、心を開き、相手を理解しようと努めることで、一週間という短い時間であっても、親友になることができる。彼女が私にとって、かけがえのない存在になったと同時に、今回の研修は、これからの自分にとって、かけがえのない貴重な体験になった。

日本語学習者との会話で、学習者が誤った文法を用いた場合、どう対処すべきか、戸惑うことが度々あった。すぐさま訂正すべきなのか、学習の場ではないということもあり、意味が通じれば、そのまま見過ごしてしまってもいいものなのか。訂正するとすれば、どのように訂正し、解説すればいいのか。文法について解説できるような教授法の技術を、現在の私は持っていない。また、誤った文法を用いる度に訂正しては、学習者の話そうとする意志を削いでしまうという危険が生じるのではないだろうか。そのようなことに思いを巡らせているうちに、機を逃してしまふ。将来、日本語教育に携わることを志す者としては、あまりに情けない状態である。同じようなことは、普段のチューター活動においても幾度か起こっていた。日本語教育に将来関わっていこうとする者にとって、教授法の知識や技術の必要性を痛切に感じた瞬間であった。カトリック大学生の日本語学習に対する意欲は驚嘆に価する。ならば、私もその姿勢を見習い、日本語教育についての、学習に励み、理解を深めていきたい。韓国の友人と再会する日には、少しでも成長した自分でありたいと願うようになった。進路を決定するこの時期にこのような実感が持てたことは、非常にありがたいことである。このような場を与えられたことに、心から感謝したい。

最後になりましたが、今回の研修の実現に向けて、御尽力くださったカトリック大学ならびに、信州大学の先生方、また、企画から運営に至るまで、大任を果たしてくださった実行委員の先輩方にこの場を借りて御礼申し上げます。

異文化としての日本ということ

信州大学人文学部3年

折笠 かすみ (日本語教育学専攻)

思い返せば、あつという間の7日間だったように思う。昨年の第4回韓国言語文化研修では、韓国を訪問し迎えられる側だった私たちが、今年は迎える側となった7日間。カトリック大学の学生は、この第1回韓国カトリック大学日本語文化研修を楽しんでくれただろうか。どんなものを見て、何を感じ、何を一番楽しんだのだろうか。私が今、第1回韓国カトリック大学日本語文化研修を振り返って思うことはこれに尽きるのである。

8月5日午後7時。カトリック大学の学生を乗せた大型バスが、実習寮に到着した。夏とはいえ、すでに日が沈みかけて暗くなり始めたころだった。韓国から日本、中部国際空港(名古屋)から松本への長旅のものともせず、カトリック大学の学生達がバスから元気に降り立つ。去年の交流で友人になった日本人学生達との再会を喜びあうカトリック大学の学生達で、実習寮前が明るい雰囲気包まれた。これから始まる文化研修への緊張と少しの不安と大きな期待に胸を膨らませた瞬間。これが今回の文化研修の始まりだった。

次の日の8月6日には、一緒に松本ぼんぼんで浴衣を着て踊り、屋台をまわってたこ焼きや大阪焼きを食べた。7日には、4年生の日本語教育実習を共に受け、松本城見学や、短い時間ではあったが自由時間の市内見学もした。いずれもお互いにとって、とても楽しく有意義な時間だったと思う。松本で過ごした文化研修前半(8月5~8日)では特に、松本ぼんぼんで浴衣を着たことと、松本城見学をしたこと、そして後半(8月8~11日)、穂高町に移ってからは蕎麦打ちや、ホームステイを楽しんでもらえたようだった。どれも代表的な「日本文化」だ。しかし、一緒に回った市内見学では予想外のことがあった。とても嬉しい「予想外」が。短い自由時間だったので、一緒に回った日本人学生は土産屋を中心に移動するつもりだったのだが、あるカトリック大学の学生が「本屋」に行きたいとリクエストしたのだ。そして結局、自由時間のほとんどは本屋に費やされた。私達は日本人3名、カトリック大学生3名で市内見学をしていたのだが、本屋に行きたいと言った学生以外の2人のカトリック大学生も、様々な本を物色して本屋にいることを楽しんでくれたようだった。聞けば、リクエストをくれた学生は、日本に来たなら吉本ばなの本を買おうと決めていたのだそうだ。嬉しい「予想外」はその後もたびたび起こった。当たり前のことかもしれないが、カトリック大学の学生は本当に色々なことについて、「古くからある日本文化」だけでなく「現代の日本文化(ドラマや本など)」、そして「日本人」に興味を持ってくれていたのだ

った。私たち日本人の方が、日本について知らないことがあるくらいだった。

私は、将来日本語教育を志す者として、「日本」と「日本文化」についての深い知識が必要だと思っている。それらは、大学に入学してから少しずつだがそれらに興味を持ち、またそれらを得る努力をしてきたつもりだった。しかし、今回私がカトリック大学生との交流から感じたのは、必要なのは知識だけではないということだった。私は「日本人の目からみた日本・日本文化」については知ろうと努力していたが、「外国である日本・日本文化」というものはあまり分かっていなかったのではないだろうかと感じた。そしてそれは、世界についての無知に由来するのではないかと感じたのである。「異国としての日本」というものは、比較できる他の国があって初めて成立する。早朝や夕方のニュースで語られる世界だけではなく、世界をより身近なものとして捉え、知ろうとして初めて分かることがたくさんあるはずなのだ。常識としてではなく、カトリック大学生について、韓国について知っていれば、もっとお互いを知り合うことができたかもしれない。韓国と日本の関係や文化の違いをもっとよく知っていれば、彼らが何に驚き、何を楽しみ、何に疑問をもったのか知ることができたかもしれない。そして、そのことについてももっともっと話せたかもしれないのだ。ホームステイなどでも、もっと出来ることがあったかもしれない。コミュニケーションはお互いを知る行為である。自分を知り、相手を知って、そして一緒に歩みあう行為である。日本語を学んでくれているからと、どこかで安心してしまっていたのはいけなかった。それでは、自ら歩み寄ることを止めたも同然なのだから……。

昨年、今年と経験した韓国言語文化研修。初めてだった去年に比べて、今年は2度目だからと色々在意気込んでいたけれど、結局今回の文化研修も自分の足りない部分に気づかされることの方が多かったように思う。けれども同時に、それが一番大切なことなのではないかと感じた。普段、「当たり前だ」と思い込んでいることについて、一つ一つ実際に経験して学ぶことができる。それがどれほど辛いことか、私は昨年と今年の2度の韓国言語文化研修で実感した。

「出会い」の大切さ —日韓言語文化交流にて—

信州大学人文学部3年
解 岩岩（日本語教育学専攻）

複雑な心境を持ちながら、第1回韓国カトリック大学日本語文化研修かつ第5回韓国言語文化研修を迎えた。今回の研修は第5回になるが、初めて日本で行うことになったものである。今回は我々信州大学の学生は、通例のようにお客様の立場として韓国に行くのではなく、お客様を迎える立場に立っていた。信州大学の学生とはいえ、私は日本に留学している一人の中国人であるため、今回の研修が近づくとつれて胸は不安でいっぱいになった。しかし、自分自身の留学生活も、一つの国際交流であると考え、自分の経験を生かして今回の交流も必ず順調に行くはずだと思った。

研修初日の夕方に、韓国カトリック大学の先生を含めて17人と初顔合わせをした。彼らは朝から飛行機に乗り、また中部国際空港から長時間バスに乗って松本に到着した。それにも関わらず、彼らは一日の疲れを隠して笑顔で私たちに接してくれた。そのとき、ずっと抱いていた不安と緊張感が一気に吹き飛ばされた。その後の歓迎会で、お互いのパートナーが発表され、私はキム・シジョンさんと一緒になった。彼女は私と同じく三年生であり、明るい女の子であった。自己紹介をし合ってから、すぐに若者同士の話が弾んできて仲良くなった。彼女は私が中国人であることを知り、中国について興味があるなどと話をしてくれ、とても気を遣ってくれた。このときの私はもう不安など一切なくなり、すっかりこれからの一週間を楽しむ気持ちになっていた。

一週間はあっという間に早かった。しかし、この一週間を通して収穫したものは少なくなかった。その中でも、「出会い」は非常に大事なことである、と知っている。今回の交流を通じて様々な「出会い」の機会を与えられた。パートナーであるキム・シジョンさんとの「出会い」と、ホームステイ先の家族との「出会い」は私の中で一生忘れられない思い出である。

研修の後半になり、最も心配していたホームステイがやってきた。日本人でない私は、韓国人であるキム・シジョンさんと一緒にホームステイ先に向かった。家族との「出会い」を楽しみにしていた。一方、日本人の家庭に泊まるのがあまりなかった私は、シジョンさんに注意を払いながら自分も気をつけなければならない、と感じた。向かった家族はペットとして飼っている犬のムクくんを入れて五人家族であった。とても居心地がいい家であり、私たち二人の緊張を緩和するために、「自分の家にいるようにしてください」と家族のみなさんは話してくれ

た。そして若い人はいないため、私たちが寂しくならないように姪と姪の友達を誘い、仲間を作ってくれた。晩ご飯は全員一緒に食べ、まるで本当の家族のようであった。食事をしながら、韓国と中国の話が絶えなかった。韓国について話したとき、現在非常に流行っている韓国ドラマのブームで話が盛り上がっていた。中国の話になると、お母さんは何冊かのアルバムを探し出し、私たちに見せてくれた。それは全部、お母さんとお父さんが今まで中国へ旅行に行ったときに撮った写真であった。その写真を見ながら話が進み、お互いの距離が非常に縮まったような感じがした。そして韓国にも何回か行ったことがあるようで、また私がこの文章を執筆する今も、家族四人で韓国へ遊びに行き、ついでにシジョンさんと会っている。忘れずに私も誘ってくれたのが嬉しかった。このように、ホームステイを経験してから、その家族と本当の家族のようになり、ずっと連絡を取っている。とても幸せを感じている。日本に一人で留学している私の精神的な支えとなってくれた。さて、ホームステイでの夜、私はシジョンさんと同じ部屋で就寝することになった。そのとき、彼女が韓国人であること、私が中国人であること、そして今は日本人の家にいることのすべてが実感できなかった。まるで仲良しの友達と一緒にいるようであった。本当に不思議な気持ちであった。二人がお互いの国境を越え、日本で出会えたのは本当に「縁」ではないか、と思った。これからはずっとシジョンさんとの「出会い」とホームステイを経験させてもらった家族との「出会い」を大切にしたいと思っている。

楽しい時間はいつも短く感じ、今回の交流は8月11日に無事に終止符を打った。今回の研修は、私にとって非常に有意義な研修であった。様々な勉強になり、また日本で学んだ知識や文化などを生かした貴重な経験をさせてもらった。日本での留學生活にも色彩が増した。このような機会を与えてくれて感謝している。

心づくしのもてなしを差し上げよう

信州大学人文学部3年
紀 偉 (日本語教育学専攻)

8月5日の夕方、強烈な拍手に迎えられ、一台のバスが信大教育学部実習寮のゲートに入った。バスのドアが開いた瞬間、沖先生をはじめ、日本語教育学の皆さんは湧き出した泉のように車体に近づいて行って、バスから降りてきた一人一人のお客さんと挨拶を交わした。そのお客さんたちは、韓国からいらしたカトリック大学の李範錫先生と16名の学生さんであった。「ようこそいらっしゃいました!」「また逢えたね。」「元気だった?」「待ってたのよ、ずっと。」久しぶりに見た顔もあれば、初めての顔もあった。しかしその歓迎の熱意はみな同じだった。それが、「第一回韓国カトリック大学日本語文化研修かつ第五回韓国言語文化研修」の始まりとなった。

今までの韓国言語文化研修は隔年で、信州大学生が韓国に行って交流を行うという形だった。ずっとお世話になっていた韓国カトリック大学へのお礼も兼ねて、今年初めて向こうの学生さんを日本に招くことになった。主催の日本語教育学分野の一員として楽しみながら、強い責任感と不安感も感じていた。しかし、韓国の学生たちが自ら積極的にこのプログラムに取り組む姿を見て、ほっとしたうえに感心した。日本語のレベルがそれぞれ違うのにも関わらず、皆さんは「郷に入っては郷に従え」という自覚を持つことに努力したのがとても伝わった。この様子でいけたら、きっと楽しんでもらえるだろうと信じた。

研修2日目の8月6日は「松本ぼんぼん」の日だった。松本ぼんぼんは毎年8月第一土曜日に行われ、松本の各企業や学校などがグループになって、浴衣やはっぴを着て、踊り歌い、町中を歩き回る大きな夏祭りである。これを機に、韓国の学生たちに日本の伝統的な夏衣装である浴衣を着てもらい、日本のお祭りの楽しさを味わってもらおうことになっていた。市役所に着いて、着付けの先生が一人一人の学生に浴衣を着せて、髪の毛までセットしてくださった。周りを見てみると、みんなの髪型がそれぞれ違い、その人の顔立ちと浴衣の雰囲気にとっても似合っていた。そのとき、韓国人も、中国人もきっと日本人になりきったような気分だっただろう。みんな笑顔が溢れて、自分のその美しさを絶対に残したいという気持ちで、写真を撮っていた。広い部屋の中で、きれいな花が咲いたように華やかだった。私も「早く皆さんと一緒に踊りたい」とわくわくした。ところが、天の神様が私たちのあまりの美しさに嫉妬したかのように、出陣しようとしたとたん雨が降りだした。止んだら踊る、降ったら休むという繰り返しをした末、結局大雨で中止になった。少し残念だったが、カトリック大生たちは一人もがつか

りした顔を見せなかった。逆に、ちょっとした体験でも楽しんでくれたようだった。みんな雨でびしょびしょだったが、笑顔がずっと消えなかった。これこそ、私たちのもてなしへの答えだっただろう。

プログラムの後半は穂高町で行われた。高橋節郎美術館と大王わさび農場と穂高神社を見学した。私は信州に3年近くも住んでいたのだが、この3つの有名な所に行くのは初めてだった。信州の素晴らしさを改めて感じた。そのほか、温泉郷と呼ばれる穂高町で、温泉体験もした。韓国には温泉がないそうであるため、日本特有だと言える温泉文化を身で体験してもらった。最初は「恥ずかしい」と抵抗感を持っていた韓国の女の子たちが実際に温泉に入ったら、幸せと喜びの表情を浮かべ私はそれを見て、心からうれしく思った。

最後に、本研修の重要な柱となるものは地域実習ホームステイであった。信大生とカトリック大生がペアとなって、穂高町の一般の家庭にホームステイさせていただいた。私のパートナーは大学院生のチョウウヨンさんだった。私たちが泊まったお宅は小松家だった。小松家にはお母さんとお父さんそれに息子さんとお嫁さんとお孫さんがいた。お孫さんは小学校2年生の真君と1年生の麻衣ちゃんだった。二人とも賢くて可愛かった。お母さんがそのお孫さんたちを連れて私たちを迎えに来てくださった。家に着いたら、兄弟二人がすぐに私たちに馴染んできた。お母さんとお嫁さんが夕食の用意をしている間に、真君と麻衣ちゃんが趣味として飼っているカブト虫を私たちにを見せてくれた。真君のお父さんが山の仕事をしているので、たくさんカブトムシを捕ってもらったということらしい。私から見ると同じカブト虫なのに、真君と麻衣ちゃんは一生懸命一匹一匹の名前とそれぞれの特徴を詳しく説明してくれた。虫が苦手な私も二人の面白い説明を聞くと、その黒い小さな生命も可愛く見えてきた。まだ子供なのにきちんとした趣味を持っていることに感心した。夕食は畑から取り立ての新鮮野菜で作った料理と、日本特有の刺身とお寿司と味噌汁だった。今もその味を思い出せるほど美味しかった。食後、一家揃って花火をした。夏に花火をすることは初めてだった。種類がいっぱいあって、本当に楽しかった。私にはもちろん、小松家ご家族にとっても、ウヨンさんにとっても、短い一日のホームステイはきっと大切な思い出になっているだろう。

一週間の研修プログラムは大成功だった。カトリック大学の李先生と学生さんたちに、またご協力いただいた信州大学の先生方及び松本市・穂高町の各地域の方々に感謝のお礼を申し上げます。「ありがとうございました」。

マイパートナー・ソヨン

信州大学人文学部3年
深見倫恵（日本語教育学専攻）

毎回韓国カトリック大学の皆さんに迎えていただいていたばかりだったカトリック大学と信州大学との交流は、今回、たくさんの方々の協力を得て、初めて信州大学でお迎えするという形となった。研修期間は1週間で、日本語教育実習や松本ぼんぼん、穂高町でのホームステイなどたくさんを経験をさせていただいた。私たちは研修中、信州大生とカトリック大生のペアになって行動した。パートナーとは1週間行動を共にする相手であり、一番親密に関わりあう相手であるため、自分のパートナーが誰であるか発表されるまで誰がパートナーであるか不安と期待でいっぱいであった。そんなドキドキワクワクの瞬間は、カトリック大生が、研修寮に到着したその日にやってきた。私のパートナーはキム・ソヨンさんであった。

私の身長は、167cm体重は××kg（口に出せないほど重い・・・とても重い・・・）。縦にも横にも広いといった感じだ（特に横だが）。それに比べ、今回のパートナーであるキム・ソヨンさんは、身長も150cmあるかないか、体重も聞いてはいないが（Ladyにそんなことは聞けない・・・）とってもスリムである。とっても小さく小柄な女の子といった感じだ。全く正反対のでこぼこコンビの誕生である。そんな私たちであるが、今回の研修が初顔合わせではない。私たちの出会いは昨年（2019年）の第4回韓国言語文化研修のことである。その日の昼食は韓国食文化体験ということでカトリック大学の学生がビビンバとチヂミをご馳走してくれた。その時ちょうど隣の席に座ったのが彼女、ソヨンである。あの頃は、私が2年生、ソヨンは1年生だった。その出会いから約1年後、私たちは再会を果たした。1年経ってはいしたが、ソヨンは変わらない笑顔であった。しかし私はこの1週間で1年前とは違うソヨンを発見することとなる。

まず一番に感じたのは、彼女の日本語のレベルアップである。1年でこんなに変わるのか、と感心した。1年前の私たちの会話を思い出してみると、「こんにちは」「何年生？」「おいしいね」など単語とジェスチャーで会話していた。何か話しかけても「分からない」という表情を私に見せた。ソヨンも自信がないのか、なかなか話しかけてくれない。あまり会話のできない私たちは上手くコミュニケーションもとれず、黙々とご飯を食べる、といった感じであった。しかし今回は違った。話すことでより相手のことを知ることができたし、冗談を言いながら笑い合うこともできた。ソヨンは「これは何？」と聞く力を得たため、私に何でも聞くようになっていた。私は何とか説明しようと、悪戦苦闘しながら答えた。な

んといっても、彼女の中に自信というものが見えた。もっと前へ進みたい、という力強さも見えた。まだまだ日本語も完璧というわけではないが、1年前とは違い、積極的で、もっと知りたい、もっと話したいという気持ちが伝わってきた。そこには、1年間努力して学んできたソヨンの姿があった。

私は日本語教師を目指している。日本語レベルの上達にはもちろん彼女たちの努力が必要だろう。しかしそこには、それを支える教師の存在がある。教師がどう関わるか、彼女たちの力を上手く引き出すことができるか、教師の姿勢によって生徒に与える影響は違う。今回の研修で、彼女たちのレベルアップと、それを支える先生方の存在を感じた。私も、そんな教師を目指したい。

次に感じたのは、何に対しても真っ直ぐな彼女の表情である。1年前ではそこまで気づくことのできなかつた新しいソヨンである。新しいものに出会った時の感動、喜び、驚き、それに悲しみや恥ずかしさ、それらの思いを表現する時の表情に私は驚かされた。見たもの感じたものがあるがままに受け止め、それに対して思ったままに表現する。目や鼻、口や耳だけで感じているのではなく、体全体で感じ受け止めている。これは彼女だけでなく、今回参加したカトリック大生全員に感じた。彼らはとにかく明るく元気だ。どんなに疲れた1日でも、どんなに遅くても仲間で集まり楽しんでいる彼ら。男女の区別はなく、何もない所にも面白みを見つけ全員で共有し、あつという間にもう笑い声が聞こえる。何であんなに楽しそうなのか。何であんなに元気なのか、そんな声が日本人学生から聞かれた。彼らは時間を精一杯感じようとしているように見えた。楽しそうに走り回る彼らを見て、その時その時を大事にすること、その時その時を精一杯感じようとする、そう学んだ。

今回の研修は、前回とはまた違った様々な体験ができた。今私の部屋の机には、1年前ソヨンと撮った2人の写真と今回撮った2人の写真が並んでいる。写真の中で微笑む変わらない笑顔。しかし、確実に何かが変わっている。これは、お互いの成長を確認する再会であった。今回ソヨンの大きな成長を感じ、今わが身を振り返っている。今度会う時に胸張って会える自分でありたいと思う。これからも変わらない笑顔の2人の写真が増えていくことを願っている。

真の「交流」とは

信州大学人文学部3年

藤田亜希子（日本語教育学専攻）

今からちょうど一年前、私は生まれて初めて韓国の地を踏んだ。あの時の思いは今でも一つ一つ鮮明に覚えている。街中に掲げられた看板のハングル、右側通行の道路、立ち並ぶ超高層ビル、そして聞き慣れないことば。移動距離は飛行機でたった3時間なのに、降り立ったその地は確かに外国だった。一週間という限られた期間ではあったが、そこで見たもの、聞いたもの、感じたものは自分の貴重な財産だ。この思いがあるからこそ、日本で行われる今回の「第一回韓国カトリック大学日本語文化研修」への期待は大きかった。韓国の学生は日本に来てどのようなことを感じるのか、実際に見て、聞いてどう思うのか、生の声が聞きたかったのである。そして、一年前にお世話になった友人たちにまた会えることが楽しみで仕方がなかった。そんな期待に満ちた思いで、私の研修は始まった。

結局、事情により松本での三日間しか参加することができなかったのだが、日韓両方の学生が浴衣を着て祭りに参加したり、街を歩いたり、一緒にお酒を飲んで話したり、たいへんに有意義であつという間の日々であった。今回の研修には、一年前の韓国における研修と大きく異なる点がいくつかある。

そのうちの一つは、私の国である日本に迎えるということである。一年前に韓国へ行って、日本との違いを体感した。その時、私が生まれてからずっと当たり前前だと思っていたことが、一步外へ出れば日本だけの特別な文化であることを知った。その際に案内してくれたカトリック大学の学生たちは皆、韓国独自の文化について、日本との違いなどを丁寧に説明してくれた。私は普段自分の国の文化についてどう考えているのだろうか、果たしてこの韓国の学生たちのように初めて日本を訪れた外国の人に自国の文化について説明できるほど知っているのだろうか、と考えた。当たり前すぎて気付かなかつたこと、改めて知る必要などないと思っていたこと、自分の周りにはそういうことがたくさんある。この研修の前、2005年の4月からカトリック大学からの交換留学生として信州大学で勉強している林さんと話していて実感したことがある。例えば、日本では飲食店で紅茶を頼めば、ほとんどの場合ミルクかレモンかと聞かれる。自動販売機やコンビニでも、あるのはミルクティーかレモンティーだ。しかし、韓国では紅茶といえばレモンかピーチなのだそう。私はどこへ行っても紅茶といえばミルクかレモンだと思っていた。また、韓国では日本で言うセンター試験のような大学入試の第一次試験は11月にあり、その試験でたいの大学の合否が決まるらしい。ひるがえって日本のことについて言えば、昔から女性の正装は着物であり、日本食と

いえば寿司であり、古い寺や城が全国各地に存在する、といった日本も知っていてほしい。また日本人としてそれらに関する知識を身に付けておくべきである。しかし、私は普段は着物を着ていないし、毎日寿司を食べているわけではないし、寺や城にも住んでいない。もっと日常生活に密着した日本の文化を知りたいし、知っておくべきだし、知ってほしいのである。林さんと話していると、何も特別なことはしていないのに日韓の違いを発見することばかりだ。カトリック大学の学生たちには、ぜひそのような体験をしてほしいと願っていた。そして、3日間でも寝食をともにして、いろいろなことを話すようにした。このコミュニケーションは、決して一方的なものにはならない。相手が違いを感じると同時にこちらにも違いが存在することを知り、相手の文化も学ぶことができる。自分も一緒に学び、楽しむことができた交流であった。

もう一点、一年前とは大きく違うことがある。それは、まだまだ初級ではあるが、自分が韓国語学習者である、ということだ。一年前の交流から韓国に大きな関心を持ち、日本語とたくさんの共通点がある韓国語を勉強しようと決心した。そして今回の研修で少しでも韓国語で会話してみようと考えていた。会話とも呼べないようなものではあったが、何人かの韓国の学生と話していて感じたことがある。自分の韓国語に自信がないこと、発音が悪いこと、なども大きな要因ではあるだろうが、韓国語で相手に話してこれで本当に自分の言いたいことは伝わっているのだろうか、と不安になるのだ。「カムサハムニダ」と言えば「ありがとうございます」だし、「ケンチャナ」と言えば「大丈夫」である。当然、含む意味や用法に微妙な違いはあるが、どの辞書や参考書を見てもそう記されている。しかし、自分の思いが母国語である日本語とは違う言語によって、本当に相手に伝わっているのだろうか、と何度も思った。自分が勉強不足なだけで、その不安は相手の反応を見ればすぐに解消されるものだったりする。だが、いくら日本で机や本に向かって話しかけたり、日本語が通じる者同士で練習しあってもこの不安は解消されなかったであろう。顔と顔を合わせての交流、つまり相手に伝わっている、ということが目に見えるということの大切さを身を以って感じた。そして、次回会うときまでにはもっと韓国語で交流できるようにと、韓国語習得への決意を新たにした。

今回の研修も一年前の研修同様、実りの多い、素晴らしい経験になった。カトリック大学の皆様、ご協力いただいた先生方、松本市、穂高町の皆様、そしてご尽力いただいた先輩方に深く感謝いたします。

真夏の思い出

信州大学人文学部3年
李 燕（日本語教育学専攻）

せみの鳴き声が騒がしく感じるときは、日本の夏が一番暑く感じるときでもある。暑い夏の中、信州大学人文学部と韓国カトリック大学との文化交流が行われた。私たちは、韓国の学生は日本の気候に慣れるだろうか、食べ物は大丈夫なのかなどと考えながら、韓国からの学生たちを迎えたのだ。日本でカトリック大学と信州大学の日韓文化交流が行われるのは、今回が初めてだということもあって、私たちは本当にたくさんの方の協力をいただきながらこの交流会に臨むことができた。

韓国の学生の中には、何度も日本に遊びに来たことのある学生もいれば、初めて日本に来る学生もいて、日本語のレベルも一定ではなかった。それが一番の問題であった。どうしたら、まだ日本語が上手に話せない学生とコミュニケーションを円滑に取れるのか。しかし、この悩みはすぐに解消された。皆が助け合いながらコミュニケーションをとったおかげで、この人がわからなくても隣の人が通訳してくれるなどして話はだいぶ弾んでいた。

最初は、自己紹介から始まって、その後自分たちの家族の写真などを見ながら家族を紹介したり、また日本と韓国の文化の違いを話し合ったりして、話はいつも深夜まで続いた。まだ日本人の学生と溶け込んでいないときは、韓国の学生だけで集まっていたのが、三日目ぐらいからは皆自分のパートナーと一緒に手を組んで歩くようになった。皆が一体となって、そこには日本人も韓国人も中国人もなかった。ただ、一緒に今回の出会いを大切にしているとしか見えなかった。

特に松本ぼんぼんの日に、皆が浴衣に着替え、踊りながら町を行進したときは、みんなとびっきりの笑顔を見せてくれた。日本でお祭りに参加するのはほとんど初めてで、とても楽しそうだった。しかし、みんながまだ踊りたい中、豪雨によりぼんぼんが33年前に始まって以来初めて途中で中止になったことが残念だった。天の神様はどうしてこんないたずらをするのだろうか、と思った。しかし、皆、それで完全に落ち込むことはなかった。ぼんぼん以外のいろいろなものが私たちの絆を深く結んでくれたからだ。

穂高町に行き、皆自分のパートナーと一緒にホストファミリーの家へ一日ホームステイをすることになったときのことだ。そこでは、ホストファミリーの温かい接待を受け、一緒に晩御飯を食べた。ホストファミリーのお父さんとお母さんはとても親切で私たちの好みの食べ物を聞いてくれたり、一緒にテレビを見ながら世間話をしたり、昔の写真を取り出して、思い出話をしながらとても楽しく過

ごした。また、私の場合は中国人であるため、パートナーのシムさん（韓国からの学生）と外国人二人が家に泊まることになった。お父さんとお母さんは迷ったのではないかと思っただが、国籍など関係なしに、自分の娘たちと同じく本当の娘のように接してくださった。日本に来て五年ほどになるが、ホームステイをしたのは今回が初めてだった。私のパートナーのシムさんは日本に何度か着たことがあり、ホームステイも初めてではなかったもので、私より自然体で日本人の家族と接することができた。しかし、私は、少し緊張してしまい、なかなかうまく話をすることができなかった。それを察してか、お母さんが積極的に私に話しかけてくださったので、時間が経つにつれて緊張感もほぐれ、「お母さん」「お父さん」「おじいさん」と自然に口にするようになっていた。その日は、みんな休むのがもったいないと感じたのか、話は深夜まで続いた。そして、まるで自分の家で寝たかのようにぐっすり寝ることができ、翌朝は今までの疲れが一気に飛んでしまったようだった。シムさんも私と同じように感じたのか、その日は一番よく寝られたということだった。日本に来てホームステイができて本当によかったと思う。一番身近に日本人の生活が体験できたのではないかと思う。

最後の日の夜、みんなはお互いにメールアドレスを交換したり、これからもずっと連絡していこうねなどと言いながら、夜が明けるのを拒んでいたようにも見えた。空港に着いて、いよいよ本当に別れが訪れたときは、もうすでに泣いている人がいて、それがまるで伝染したかのように皆次々と泣いてしまったのだ。たった一週間の交流にもかかわらず、皆別れを惜しんでいた。「来年また会おうね」と言いながら、「絶対韓国に来てね」などと、何度も何度も確認をしていた。今でも、そのときのことを思い出すと泣きそうになるのだ。

真夏の暑さは皆の体力を奪い、元気をなくしてしまうが、今回の研修があったその一週間だけは特別に暑く感じなかった。本当にすばらしい思い出を残してくれて、韓国の学生に感謝しているし、またお世話になった穂高町のお父さん、お母さんにも感謝している。真夏にそのようなすばらしい思い出を残してくれて、皆さん、本当にありがとうございました。

韓国人との初交流

信州大学人文学部2年
金 玉華（日本語教育学専攻）

今回の韓国言語文化研修は、信州大学が韓国のカトリック大学との交流を始めから、第5回目を迎える年でもあり、初めて韓国から来日して交流した意義のある年でもある。私は信州大学の学部生として今回の研修に参加することになった。

今回の研修は、8月5日から11日までの7日間行われた。ちょうど、夏休みが始まり、みんなの試験への緊張感が、今度はカトリック大学生を迎える緊張感へと切り替わったときであった。今回の日程の前半は、教育学部の実習寮で寝泊りしながら、カトリック大学生に信州大学を紹介し、後半は穂高町にある鐘の鳴る丘で寝泊りしながら、美術館や、わさび農場、穂高神社などを見学し、日本の家庭をカトリック大学生と共にホームステイをするという形で行われた。

5日の夕方、カトリック大学生は出迎えに行った荒井班とともに実習寮に到着した。そして、カトリック大学生を部屋に案内し、同じ部屋の人と初めて会うことになった。私たちの部屋は留学生の部屋で、信州大学の学部生が3人も留学生であった。カトリック大学生の方は2年生、4年生と院生の3人で、みんな初めての日本であるためか、少し不安な顔を見せていた。自己紹介を終えてから、カトリック大学生の方が長い旅で疲れているということで、その日は早く就寝することになった。

次の日の6日の朝ご飯の後、パートナーの発表があった。私のパートナーは4年生のソンジュヨンさんであった。ソンさんは恥ずかしがりやで、積極的には話かけてこなかった。私もソンさんと似たような性格であるため、最初はお互いの交流が困難であった。その日は松本ぼんぼんの日で、みんなで浴衣を着て町中を思い切り踊ってみようということだったが、30分間しか踊っていないにもかかわらず、突然の雨であいにく松本ぼんぼんは中止となった。みんな惜しい気持ちを抑え切れなかった。そして、私たちは3年生の解岩岩さんの提案でラーメンを食べて体を温めることにした。日本文化を本場のおいしいラーメンで味わおうということになった。その店の味噌ラーメンがたいへんおいしく、皆舌鼓を打ちながら、お腹いっぱい食べた。食べ終わると、松本ぼんぼんでの疲れが溜まっていたのか、みんな体がだるくなり、早く実習寮に戻って寝た。

7日から8日の午前中までは、信州大学の4年生の実習にパートナーと一緒に参加した。また、カトリック大学生は信州大学、松本城、および市内見学に参加した。

8日の午後から1日朝までは穂高町に移動して穂高町で見学することになった。8日の夕方、穂高町のホームステイ先の人と初対面の食事会があった。私とソンさんのホームステイ先は竹川家だった。その日、お父さんとお母さんがきてくださった。お母さんはとても思いやりのある方で、私に日本での生活状況を聞き、励ましてくれた。私の方もつい余計なことまで、言ってしまったが、お母さんは最後まで親切に聞いてくださった。食事会が終わって、みんな解散した後、学生たちは韓国のゲームをして夜遅くまで楽しんだ。それで、疲れが少し溜まってしまった。

次の日、前日の疲れのためか、ずっとバス酔いしてしまい、穂高での見学はぼろぼろとしてすぎてしまったが、夕方になってホームステイ先の方が迎えに来たとき、初めてのホームステイであったためか、緊張したあまりぼろぼろとしていた私がどこかに去ってしまったかのような感覚があった。一方で、ホームステイ先のお父さんとお母さんも初めてホームステイを経験するという事で緊張していた。お父さんの顔色から、緊張の様子を見て取ることができた。竹川家は二階建ての和風主屋とともに離れもあった。大きな庭には倉庫があって、自作の米を保存していた。家の裏側には小さな畑があり、そこで自作の野菜を作っていた。私とソンさんは離れで寝ることになった。その日の夕食の後、私たちは、竹川家の皆さんと庭で花火大会をした。久しぶりの家族の暖かさに囲まれ、まるで、家に帰ったようだった。次の朝、お父さんと一緒に裏の畑で育てている野菜を取って、お母さんが準備した朝ご飯をおなかいっぱい食べた。短いホームステイだったが、お世話になった竹川家の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいである。

ホームステイが終わり、午前中は蕎麦打ち体験をした。自作の蕎麦はたいへんおいしかった。その日の夕方、カトリック大学生の送別会で焼肉会を開いた。私のパートナーも最初と違って積極的に話すようになった。また、ホームステイ先のお母さんも来てくださって、本当にうれしかった。

そして、ついにカトリック大学生が韓国に戻る日がきた。私はソンさんに空港まで送ってあげると約束していたが、体の調子がよくなかったため、行くことができなくなった。

今回の研修を通して、人の世話をするという事は容易でないことが分かった。今まで、他の人に迷惑ばかりかけていたことを思い出すと申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

貴重な一週間

信州大学人文学部2年
金野安希子（日本語教育学専攻）

「心を開き、礼を尽くして交流する」これを全体目標として掲げ、韓国カトリック大学の学生16名と一週間を共に過ごす日韓言語文化研修が、8月5日から始まった。カトリック大学の学生たちが日本に来るのは今回が初めてということもあり、どのように迎え入れたらよいのか、どうすれば喜んでもらえるのかなどといった様々な不安と、「韓国の学生と知り合いになれるのだ」という大きな期待が心の中にあった。カトリック大学の学生たちに満足して頂くことはもちろん、自分にとっても今後の糧になるよう多くのことを学ぼうと決めて、この研修に臨んだ。

初日の夕方、空港からバスで3時間という長旅に疲れも見せず、李先生と16名の学生が到着し、まもなく歓迎会が行われた。ただでさえ、人見知りをしてしまう私は上手く話せるかとても心配していたが、カトリック大学の学生たちが明るく話しかけてくれたり、いろいろな質問をしてくれたりしたおかげで、楽しい時間を過ごすことができた。しかし、自分が迎える側であるのに、逆に緊張を解いてもらったようで少し情けない思いがした。また、その場で発表されたパートナーは私と同じ2年生で、すぐに仲良くなることができた。

そして、翌日から研修の日程にそって様々な行事が行なわれた。松本ぼんぼんへの参加や日本語教育実習、交流会、温泉体験、ホームステイなど、日本人の私にとっても初めてのことがあった。なかでも印象に残っているのは、4年生が行なった日本語教育実習と穂高町でのホームステイである。

日本語教育実習では、初級クラスの授業を、パートナーと一緒に生徒として受けた。日本語教師を目指しているにも関わらず、実際の授業はどのようなものなのか全く分からなかったので、とても勉強になった。授業を受けていて感じたことは、事前の準備が入念になされているということである。今回は、ホームステイに向けて日本の家庭でのマナーを学ぶという内容だったが、生徒が理解しやすいように場面ごとの絵を見せたり、その場での会話を考えて実演してみせたりと、非常に分かりやすい授業だった。また、生徒一人一人に声をかけて理解状況を把握するなど、先生の心遣いも感じられた。自分はまだ学生で教わる側にいるため、教師として生徒の前に立つということを想像もできないが、教えることの大変さや難しさをわずかではあるが実感できたような気がした。

穂高町でのホームステイについては、私はこの研修中の最大イベントと考えていた。同じ日本人の家庭ではあるが、見ず知らずのお宅に一泊させて頂くという

ことには少なからず抵抗がある。日本人の自分でさえ、このように感じていたのだから、韓国人である私のパートナーは日本の家庭で一日を過ごすことに、さらに大きい不安を持っていたようだった。そのようなパートナーに対して「大丈夫、きっと優しく接してくれるよ。」と声をかけてはいたものの、やはり心配の念は消えなかった。しかし、その思いは前日の食文化交流会での顔合わせの時点できれいになくなったのである。私たちのホストファミリーである高橋さんご夫妻はとても優しい方々で、「明日、楽しみに待っているからね。」とおっしゃってくださった。その一言に、私もパートナーも本当に安心することができたのである。実際のホームステイでは、お父さんやお母さんの手作り料理を頂きながら、韓国の文化や学校生活についての話をしたり、ご家族の写真を見せて頂いたりした。話は途切れることなく、夜の 12 時近くまで起きていた。翌日は、午前中までということもあり、お父さんが経営されている会社を訪問した後で、美術館に行き、あっという間にお別れのときになってしまった。たった一泊だけではあったが、まるで自分たちの家族のように私たちを受け入れてくださった高橋さんご夫妻には、本当に感謝の気持ちでいっぱいである。

この研修を通して、私自身は韓国について何も知識を持っていなかったということを感じた。カトリック大学の学生たちは日本に関心があり、多くの場面で様々なことを質問してきた。その質問には、日本の場合はどうなのかというものが多かったが、韓国の何に興味があるのか、韓国の文化をどう思っているかというものもあり、私はこれらの質問に上手く答えることができなかったのである。韓国からの学生を迎えるにあたって、少しも相手の国やその文化について知ろうとしていなかった自分が、とても恥ずかしかった。私が少しでも韓国についての知識を持っていれば、お互いにより深い交流が図れたはずだ。何か新しいものに出会うときは、準備が必要である。しかし、それは形式的なものだけではなく、内面においても言えることだろう。このことを改めて実感させられた一週間であった。

今回の研修は私にとって非常に有意義なものとなった。海外の学生と交流し、改めて日本の文化を顧みる。その中で、自分自身が学ぶこともたくさんあった。多くのことを感じ、学び取ることができたこの経験を大切に、今後の生活に生かしていきたいと強く思う。

たくさんの人との出会いと別れからのスタート

信州大学人文学部2年
中西彩乃（日本語教育学専攻）

出会うということは別れがあるということで、別れのときはたいへん辛いものである。しかし、その後に残ったものは寂しさや悲しさだけではない。今の自分を省みる、もっともっと自分を高める、そのために自分は何がしたいのか、何ができるのか、そういったことを考える機会を与えてくれた。言語も文化も違う人たちとの「出会い」という刺激によって、私も何かしなくては、自分の目標に向かってもっと頑張らなくてはというやる気を起こさせられたのだ。

私のパートナーはとても強靱な意志を持っている人だった。結婚もしている、子どももいる、大学から離れれば優しくなお母さん。しかし、日本語を学ぶ姿勢、日本という文化に触れようとする姿勢は、その穏やかな外見からは思いもつかぬほど、力強く驚くほどのものだった。パートナーは日本に何度か観光で来ていて、会話するのにほとんど困ることがなかった。私たちは多くの時間を一緒に過ごした。大学の話や日本と韓国とのこと、家族の話や人生についてなど、深い話もした。本当にいろいろ話した。初めての、しかも他国の人とここまで話ができたというのは、人見知り激しく、人と話すことが苦手な私にとって、本当に、本当に驚くべきことであった。国は違えど、これほどまでに打ち解けられたのは信じられないが、とても嬉しいことだと思う。

しかし、ふと思う。私が韓国へ行ったら、カトリック大の学生さんが日本で日本語を使っていたのと同じように、韓国語でコミュニケーションできるだろうか。今の段階では考えられない事である。もちろん、カトリック大の学生さんたちは日本語を学ぶ授業があり、それが大学で勉強する第一の目的である。一方、私は韓国語を学ぶことが大学での目的ではなく、韓国語を学ぶ授業をとらなくてはいけないわけではない。しかし、このままで良いのか。来年韓国へ行き、カトリック大の学生さんに迎え入れてもらうとき、日本語しか使えないなどということでは、失礼だと思ったのである。今回の研修がこんなにも充実したものだと感じたのは、きっと日本語でお互いがなんなくコミュニケーションをとれたことが、大きく関係していると思うのである。次回の韓国での研修の際には、韓国語が少しでも話せるようになればと、今回の研修を終えて、韓国語を学ぶきっかけを私は得た。

また、穂高町の方々の家にホームステイをするという貴重な体験もした。外国でのホームステイはしたことがあったが、日本でホームステイをするというのはなかなかない機会、カトリック大の学生さんたちには大変よい文化体験になっ

たと思うが、日本人の私にとっても、それはとても素晴らしい体験であった。実際、私はパートナーに負けないくらい緊張していた。パートナーのお手本とならなければというプレッシャーに、失礼のないようにと自分のことで精一杯で、よいお手本となれないかもしれないという思いがあった。しかし、そこで出会ったホストファミリーの方と、一緒にご飯を食べ、素敵な時間を過ごした。日本で牧師をしていらっしゃるという韓国人のご家族や、いろいろな方との交流をすることができ、大きな刺激となった。私の思いを聞いてくださったり、とても親切に優しく接してくださったり、ホストファミリーの方には本当に感謝の気持ちでいっぱいである。他県から長野へ来た私にとって、穂高町は自然が豊かで美しく、この地で素晴らしい人たちと出会えたことは忘れ難い思い出となった。

テレビでも、映画でもよく目にする韓国という国。そのおかげか、どこかすぐそばにあるような気がしていた。アメリカや中国と同様、外国であることに変わりはないのだが、なぜか韓国だけは違った。過去に日本は韓国に対して、誠に勝手に非道なことなどをたくさんしてきた。今日、反日運動も見られる。しかし悪いことだけではない。日本では多くの韓国映画が放映されたり、韓国でも日本の映画が人気であったりと、文化の交流が盛んに行われているのも事実である。これからの時代を担う私たちが少しでも、このように日韓の交流によいものをもたらせればよいと思う。

人との出会いがあればこそ、自分に足りないものや自分の奥底で眠っていたものに気付く。その新たな発見で人は成長する。新たな発見はいいことばかりではない。悪いことも受け止めて、今の自分には何ができるか、何をすればよいか、明日の私が、一年後の私が、少しでも輝いていられるように、今の思いを忘れずに進んでいきたいと思う。新たな出会いと別れによって得たもの、その刺激に奮い起こった私の思いを叶えるために、今、新たなスタートをきりたいと思う。

国際交流の大切さ

カトリック大学言語文化学部3年

2005年度受入交換留学生

林 智善 (イム・ジソン) (日本語日本文化専攻)

1. 韓国と日本での国際交流

去年のカトリック大学での国際交流行事に続いて、国際交流行事への参加は、個人的に二回目であった。韓国では広報編集部の部長として、日本では日本語教育学の交換留学生として、それぞれ違う立場で参加することができて、とても大事な経験になったと思う。日本語では簡単な表現しかできなかった去年は、ただ日本人との出会いにわくわくして、一週間の忙しいスケジュールにもかかわらず、楽しい時間を過ごすことができた。特に、その時出会った日本の友達の温かい第一印象が、日本人全体に対する印象で残って、今まで良いイメージで続いてきていると思う。それと同じように、今年の行事の時、日本の学生たちとホームステイの家族たちが見せてくれた優しさは、きっと韓国の学生たちの心に温かい思い出で残っているだろう。

2. 穂高町でのホームステイ

「お母さん、お世話になりました。」

8月9日から10日までのホームステイ。ただ1日だけ泊めていただく短い時間だったが、ホームステイ家族と別れる時は辛いくらい親しくなっていた。ソウル出身であり田舎に行く機会がなかった私にとって、穂高町でのホームステイは、日本のきれいな景色と家庭文化を体験できる良い機会だったと思う。

親切に宿所まで迎えに来てくださったホームステイ家族は、まずスーパーに寄って、一緒に買い物ができるようにしてくださった。また家に行ってから、一緒にのり巻きを作りながらいろいろな話をしたり、家庭で栽培したおいしい果物を食べたりした。特に記憶に残っているのは、夜の花火の時にお母さん手作りの浴衣を着させてもらったことだ。夏にはやはり花火。さらに浴衣まで着るということは、日本映画でしか見られなかったことだった。その次の日には、朝早く起きて豆腐工場に行った。下ごしらえをした大豆を持って行き、昔からの製法で豆腐を作った。その豆腐をバーベキューパーティーでみんなと食べたが、とてもおいしく、おもしろい経験だった。

家族の皆さん、穂高町の方々はとても温かく、短い間だったが一生忘れられない思い出となった。ありがたい気持ちでいっぱいだ。

3. 松本ぼんぼん

私にとって初めての祭りだった「松本ぼんぼん」は、ただ見るだけではなく、実際に参加できる行事だったので、より楽しむことができた。日本の浴衣を着て、大勢の人々と一緒に同じ踊りを踊るのは、今まで想像もできなかったことだった。同じ曲調が何度も繰り返されて、同じ踊りを何千人もが踊ったことが、特に印象的だった。残念ながら、天気がだんだん悪くなり、雷や大雨のせいで予想より早く終わってしまったが、日本の祭りの文化を体験できた貴重な機会だった。

普段自分の考えをあまり表現しないと評価されている日本人が、老若男女問わず、誰でも主人公になれる舞台が祭りではないかと思った。今まで私が抱いていた日本人のイメージとは違った、新しい一面を発見することができた。

4. 日本言語研修の意義

外国人として「他の国を理解する」ということは本当に難しいことに違いない。私もほぼ8ヶ月間、日本で日本人と触れ合いながら生活してきたが、まだ日本と日本人を理解するには時間が足りないと思う。「留学する前から日本の文化を直接感じる機会がもっとあったら」と感じさせられるのだ。その点で、今回の日本語文化研修は、韓国の学生たちに大きな意味を持たせたと思う。祭りやホームステイなどは日本の文化を身をもって経験したことだったし、日本の学生たちとのコミュニケーションはきっと日本語学習の新しい刺激になっただろう。もちろん、私にとっても今回の行事は、人と人とのつながりの大切さ、国際交流の大切さをもう一度あらためて感じた時間だった。

日韓言語研修に参加して

カトリック大学言語文化学部3年

2005年度受入交換留学生

齋 美仙（オム・ミソン）（日本語日本文化専攻）

蒸し暑い日々が続いた2005年の夏、交換留学生として日本にいた私は、初めての日本の夏の戦いと、5ヶ月めに差し掛かった他国生活によって心も体もとても疲れていた。そんな私にとって、一週間の韓国言語文化研修は新たに元気を付けてくれたありがたいものである。

初めは少し不安もあった。仲良い友達もいれば初めて会う人々もいるし、それに生活習慣が違う外国人と一緒に一週間も合宿するというのが果たしてできるものであろうかと思っていた。だがそれは無駄な心配であったのがすぐわかった。自由時間の時、韓国や日本の簡単なゲームをする時にお互いに「ワハハ〜」と笑いながらわいわい騒いだり、寝る前まで恋愛話をしたりしながら同じことを考えている、同じことに興味を持っている同じ年齢の大学生だと感じ、みんなとすぐ仲良くなることができた。また同じグループの友達と汗をかきながら逃げ出すことなく与えられた仕事をすることによって、国が違うかどうかは関係なく、一つになって楽しく過ごすことができた。

この一週間は楽しければ楽しいほど早く過ぎてしまったが、それは5ヶ月間日本に居ながらも、なかなかできなかった有益なプログラムがあったのが一つの理由だと思う。そのプログラムの中で一番良かったのは松本ぼんぼんと穂高町でのホームステイだ。

松本ぼんぼんは毎年8月の第1土曜日に行われる松本の大きな夏祭りである。今年で31回目になったという松本ぼんぼんは特有の歌に合わせて踊り歩く形で行われた。私たちは松本市役所のおかげで、参加者全員ゆかたを着て参加することができた。髪飾りまで気をつけてくださって私はウキウキしていた。雨がたくさん降って途中で中断になったのは残念だったが、それにもかかわらず忘れられない思い出になった。初対面の松本の市民と心の壁なく一緒に踊りながら歌ったり、しゃべったりすることができたのはこのときがはじめてであり、また最後かもしれないからである。

他に楽しみにしていた穂高町でのホームステイは私にまた一つの家族を作ってくれた。私が泊めて頂いたお宅はおばさんとお母さん、お父さん、そして姉妹2人の5人の幸せそうな家族だった。お母さんは夕飯のとき、私に食べられないものがあるかどうか、味は口に合うかどうか何回も聞いてくださった。そしてお

父さんは私が気まずく感じているのではないかと、にぎやかな雰囲気を作ってくださいたり、気をつかってくださったりしてとてもありがたく思った。夕食後にはおばあさんに用意して頂いたゆかたを着て家族全員と花火をしたが、そのとき妹2人とも親しくなるとてもうれしかった。この家族は私が穂高町を離れるとき、朝早い時間だったのにもかかわらず合宿所まで見送りに来てくれて嬉しかった反面、涙を流すぐらい心寂しくなった。

研修の時も研修が終わってからもいろいろなことを感じ、いろいろなことを考えた。その中で一番大きく気づいたのはこの一週間が私にとって日本での生活のひとつの転換点になったということだ。もちろんこの研修の趣旨は両国の文化交流だと思う。しかし、それに加えて私に、これから残った日本での生活をどのように過ごしたら良いのかを教えてくれた。日本に来てから半年間、新しい環境に適応するために頑張りながらも、学校のスケジュールと日本語に対する自らの欲に追い立てられていらいらしていた。ところがこの一週間の間、楽な気持ちでなじみの友達に相談することができ、久しぶりに軽い気持ちを持つことができた。その間、ありのままの私に自信を持つことが重要だと考えるようになった。「前だけを向いていたらいい、あとのことを今から気にしていてもしょうがない」そう思ったのだ。また、緊張せずに楽な気持ちで日本人の学生と話せる機会が多かったが、それがとても役に立っているのが分かって、どのように勉強していけばいいか身をもって感じることができた。

私は今回の研修を通してたくさんのもので得て参加して良かったと思う。それが私だけでなく参加した多くの学生たちもみんな同じだと思っている。

韓国言語文化研修

カトリック大学言語文化学部 2年

2005 年度受入交換留学生

金 煥善 (キム・ヨンソン) (日本語日本文化専攻)

2005年8月5日から11日までの一週間、信大生とカトリック大生との親善交流が行われた。今年は前年と違い、カトリック大学生たちが信大へ初めて来た。この行事を準備しながら同じ専攻をしている人たちともっと親しくなってくれしかった。何よりも先輩たちだけではなく、同じ学年の学生も来ると聞いて本当に楽しみだった。4ヶ月ぶりにイ先生をはじめ同期生と先輩たちに会うことができ、本当にうれしかった。一週間、日韓の友達と一緒に合宿をしながらたくさん話をできてよい時間になった。

交換学生として来た私は一方で信大生の立場で、また一方ではカトリック大生つまり韓国人の立場になって参加した。日韓ブームというテーマを持って討論する際には韓国人の立場で、食文化交流会では日本人の立場になって行事に参加した。この行事に参加しながら日本へ来てできなかった様々な日本文化を体験することになった。松本ぼんぼんという夏祭りをはじめ、そば体験、わさび農園、穂高町でのホームステイなど充実した時間を過ごすことができた。

松本ぼんぼんという松本を代表する祭りを前から楽しみにしていた。韓国ではこのような地域の祭りはないので、楽しみな気持ちをもっと膨らんだ。ぼんぼん祭りの時にはあらゆる車が渋滞になるそうだ。本当にそうだったのでびっくりした。私たちは道路で松本の人々たちと一緒に踊りながら歩いた。小学生から80歳以上のおじいさん、おばあさんまで派手やかな衣装を着て列に並んで踊る姿が珍しかった。短い時間の間だけだったが、韓国にも日本のような地域の祭りがあつたらもっと良いのではないかなと思った。残念ながら途中の急な雨で、松本ぼんぼんは中止になってしまい、今年の祭りは終わってしまった。短い時間であつたけれども、韓国では経験できないことだったので、とても良い思い出として残るだろう。

そして、食文化交流会で穂高の人々に韓国料理を紹介する時間を持った。韓国人である延先生とキルリョン先輩と一緒に代表になって韓国料理を準備した。ビビンバ、チャプチェの食べ物を中心に色々な料理を70名～80名分、作らなければならなかったのが本当に大変だった。日本人と他の韓国人たちが手伝ってくれたが、決められた時間までに作るためにはやはり手が足りなかった。辛うじて、時間に間に合つて穂高の人々に韓国料理を紹介できた。この交流会が終わって見送りをした後、片付けようとしたとき、ほとんどビビンバがそのまま残っていてび

っくりした。「どうして食べなかったかなあ...まずかったかなあ...」と考えた。後で聞いたことだがどのように食べるのかわからなかったそうだ。その時に、作り方だけではなくて、混ぜて食べるという食べ方まで教えてあげたらもっと良かったかもしれないと考えた。このようにして一日が終わった。

何よりも、一番印象に残る体験はやはりホームステイだった。日本に来る前から一回くらいはしてみたいなあと考えていたので、夢を果たせると意気込んでいた。ホームステイは日本人一人と韓国人一人がパートナーになって行われた。私は4年生の高田さんとパートナーになって訪ねた。私たちがお世話になったところは娘さん、息子さんが結婚して、今は二人で住んでいるおじいさんとおばあさんの家族だった。この家は2階まである旅館だった。2階で泊まりながら見た穂高の眺めは美しかった。空気も新鮮だし、森の中に家があったので森林浴をしている気持ちだった。おばあさんは刺身をはじめ天ぷら、鍋など色々な和食を作ってくれた。その時食べた天ぷらは本当に美味しくて記憶に残った。1泊2日の短い時間だったけど、日本の家庭文化を少しでも見ることができて良い経験になった。

行事はとても短い時間であったが、いろいろな日本文化を体験できてよい時間だった。また、一週間の間あまり寝られなくて準備した日教生の代表の人たちに、感謝を述べたい。交流というものはその期間だけで終わるものではないと思う。来年も再来年もカトリック大生と信大生の交流を通じてお互いに文化を理解して話し合いながら親しくなればよいと思う。